

富山大学人文学部令和4年度卒業論文

富山型デイサービスにおける高齢の利用者と障害のある子どもの交流

富山大学人文学部人文学科  
社会文化コース 社会学分野  
学籍番号 11910146  
氏名 松本みなみ

## 〈目次〉

|                             |    |
|-----------------------------|----|
| 第1章 問題関心                    | 1  |
| 第2章 基礎概念                    |    |
| 第1節 富山型デイサービスとは             | 2  |
| 第2節 幼老複合施設とは                | 2  |
| 第3章 先行研究                    |    |
| 第1節 幼老複合施設における幼老の交流         | 3  |
| 第2節 幼老の交流の効果と課題             | 4  |
| 第4章 調査                      |    |
| 第1節 調査概要                    | 5  |
| 第2節 大空と大地のぼぴー村              |    |
| 第1項 施設概要                    | 6  |
| 第2項 空間的な特徴                  | 6  |
| 第3項 利用者の特徴                  | 7  |
| 第4項 1日の流れ                   | 7  |
| 第5項 利用者の過ごし方                | 8  |
| 第3節 専正寺デイサービスまごころ           |    |
| 第1項 施設概要                    | 9  |
| 第2項 空間的な特徴                  | 9  |
| 第5章 大空と大地のぼぴー村 エスノグラフィー     |    |
| 第1節 フィールドワーク初日              | 10 |
| 第2節 変化していく関係                |    |
| 第1項 登場人物                    | 11 |
| 第2項 ハナちゃんとアオキさんの交流の様子       | 11 |
| 第3項 お世話焼きなアオキさん             | 12 |
| 第4項 スタッフは「大助かり」             | 13 |
| 第5項 変化していく関係                | 13 |
| 第6項 変化していく関係、それでも           | 13 |
| 第3節 優しい高齢の利用者               |    |
| 第1項 登場人物                    | 15 |
| 第2項 ユウカちゃんを受け止めるノバラさんとタバタさん | 15 |
| 第4節 先入観を持たない高齢の利用者          |    |
| 第1項 登場人物                    | 18 |
| 第2項 先入観を持たないミヤシマさん          | 18 |
| 第3項 障害児と知っているヒダさん           | 20 |

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 第5節 配慮する子どもたち                      |    |
| 第1項 登場人物                           | 21 |
| 第2項 高齢の利用者に配慮するトモくんとソウタくん          | 21 |
| 第6章 専正寺デイサービスまごころ エスノグラフィー         |    |
| 第1節 フィールドワーク初日                     | 23 |
| 第2節 ムードメーカー                        |    |
| 第1項 登場人物                           | 24 |
| 第2項 タカちゃんと高齢の利用者の交流の様子             | 24 |
| 第3節 ムードメーカーのタカちゃん                  | 25 |
| 第4節 タカちゃんの障害について高齢の利用者たちはどう感じているのか | 26 |
| 第3節 スタッフの助けになる高齢の利用者               |    |
| 第1項 登場人物                           | 28 |
| 第2項 お世話をするカネさんとムライさん               | 28 |
| 第4節 衝突は問題か                         |    |
| 第1項 登場人物                           | 30 |
| 第2項 ケイクンとムライさんの交流の様子               | 30 |
| 第3項 衝突は問題か                         | 31 |
| 第4項 ケイクンはムライさんをよく見ていた?             | 32 |
| 第5節 何もしない時間                        |    |
| 第1項 登場人物                           | 34 |
| 第2項 何もしない時間                        | 34 |
| 第6節 フィールドワークを通して                   | 36 |
| 第7章 エスノグラフィーから見えること                |    |
| 第1節 交流の形態と内容                       | 37 |
| 第2節 交流をする利用者の特徴                    | 38 |
| 第3節 交流の様子                          | 38 |
| 第4節 障害のある子どもに対する高齢の利用者の接し方         | 39 |
| 第5節 障害のある子どもの配慮                    | 39 |
| 第8章 考察                             |    |
| 第1節 利用者本位の交流の可能性                   | 40 |
| 第2節 交流がつくる居場所                      | 41 |
| 第3節 子どもと高齢者の関係の変化                  | 42 |
| 第4節 子どもと高齢者の関係の捉え方                 | 43 |
| 第5節 「交流」を再考する                      | 44 |
| 参考文献                               | 45 |

## 第1章 問題関心

少子高齢化や核家族化が進行する現在の社会で、子どもと高齢者など世代を超えた交流の機会は限られている。そして近年は、幼老複合施設や宅幼老所といった、子どもと高齢者のケアを複合的に行うことができる形態の介護・保育施設が増えてきている。そうした施設では、子どもと高齢者の交流が生まれやすく、交流によって相互作用が生まれることもある。

また、幼老複合施設は、同じ敷地内に子ども用の施設と高齢者用の施設を併設した、大規模な施設であるのに対し、宅幼老所は、同じ建物内で子どもと高齢者のケアを行う小規模な施設であることが多い。大規模な施設では、イベントや行事など形式的な交流が主流であるが、小規模施設では、共に過ごす時間が多く、利用者同士の距離が近い施設も多い。このことから、小規模施設では、利用者間の自然な交流が発生しやすく、継続的な関係性を築くことができるのではないだろうか。

本研究では、小規模な宅幼老所（富山型デイサービス）に焦点を当て、施設を利用する子どもと高齢者の交流の実態を調査する。そして、小規模施設における子どもと高齢者の交流が持つ意味や可能性について考察したい。

## 第2章 基礎概念

### 第1節 富山型デイサービスとは

富山型デイサービスとは、年齢や障害の有無にかかわらず、誰もがサービスを利用できる小規模・多機能・地域密着が特徴の福祉施設である。一般住宅をベースとして、利用定員が概ね15人程度であること、高齢者・障害者・子どもなど、利用者を限定せず、誰でも受け入れ対応していること、身近な住宅地の中に立地しており、地域との交流が多いことなどが特徴である。

### 第2節 幼老複合施設とは

幼老複合施設とは、保育園や児童館などの子ども用の施設と、老人デイサービスセンターや特別養護老人ホームなどの高齢者用の施設が同じ敷地内に併設された施設のことを指す。幼老複合施設では、施設間の距離が近いことから、子どもと高齢者の交流を定期的に設けている場合がある。

### 第3章 先行研究

富山型デイサービスや宅幼老所などの小規模施設における子どもと高齢者の交流（以下、幼老の交流）を主題的に論じた研究はこれまでほとんど提出されていない。幼老の「交流」を論じている大半の研究の特徴として以下の2点が挙げられる。

- (1) 研究で取り上げられる子どもたちは、健常児の場合が多い。障害があることについて一切触れられない。
- (2) 研究対象の施設は、比較的大規模な幼老複合施設であることが多い。

そこで本研究は、そうした幼老複合施設を対象として論じる先行研究が、幼老の「交流」をどのようにとらえているのかを以下にレビューする。

#### 第1節 幼老複合施設における幼老の交流

先行研究から、幼老複合施設で見られる幼老の交流の傾向が浮かび上がった。

(1) 幼老の交流形態は施設側が事前に計画した「計画交流」が主流。その他に、計画性はなく、自然に発生する「自然発生交流」があるとされる。

北村（2003）は、幼老複合施設で行われる幼老の交流を以下の2種類に分けられるとする。1つは、スタッフが内容や形態などを事前に企画した上での「計画交流」である。例えば、イベントや季節の行事など。もう1つは、計画性はなく、その場で自然に発生する「自然発生交流」である。例えば、挨拶や施設外での交流など。また、幼老複合施設で見られる交流は「計画交流」が主である場合が多い。

(2) 幼老の交流における職員の積極的な介入がみられる

幼老複合施設では、幼老の交流を創出するために施設側の主体的な取り組みが必要とされる場合が多い。金森（2012）は、交流を企画するスタッフが子どもと高齢者に与える影響の大きさや役割の重要性を論じている。また、交流に関して、子どもと高齢者の双方向の交流として捉えるのではなく、交流を企画するスタッフの三方向の交流として捉える必要があるとしている。

(3) 幼老の交流を促進するような工夫された空間利用がみられる

金森（2012）は、幼老複合施設では、空間の利用や設備の配置によって、幼老の交流の頻度が異なってくるとしている。北村（2003）でも、お互いの姿が見られるように、高齢者の食堂を保育園の遊戯室や園庭がみえる配置したり、両施設の境界部に設置される扉を格子やカーテンにしたりするなど、ハード面での工夫が取り上げられている。

## 第2節 幼老の交流の効果と課題

先行研究では、幼老複合施設における幼老の交流の効果や課題が論じられている。

効果に関して、北村（2003）は、自立度の高い高齢者では、子どもとの双方向的なコミュニケーションを通して、子どもに教えたり、子どもから慕われたりすることが自信や生きがいとなり、子どもの側も自分の存在が高齢者から喜ばれることが自信となり、年老いた世代や体の不自由な人に対する理解が深まることを挙げている。また、立松（2008）では、高齢者と子どもの小規模で固定化したメンバーの日常生活における関わりが、自然な関係性やお互いを理解して思いやるような関係性、さらに持続的な関係性を構築させていくとしている。

課題に関して、金子、中西（2007）は、子どもと高齢者の関係は、両者がいれば自然と会話や交歓が生じ、子どもの成長や高齢者の積極性を促す効果があるといった関係ではなく、むしろ両者の間に食い違いが生じるなど、会話や応答も生まれず、お互いが別々の方向を向くような「背中合わせの関係」であるとしている。また、幼老統合ケアでは、交流の機会や場を人工的に設定することによって積極的な効果を求めるが、生活実感や他者との関係を作っていくプロセスがないため、子どもは大人によって期待された行動様式のみを身につけていき、交流は形式的なものに留まるとしている。

第1節で取り上げた、北村（2003）の「計画交流」と「自然発生交流」のように、幼老の交流を複数に分類して捉える先行研究は多い。実際に本調査で観察できる幼老の交流は、どのような交流といえるのかに着眼して記述・分析を行いたい。

また、先行研究には暗黙の前提がある。例えば、交流の実態を調査した上で、その成果（子どもや高齢者にどのような効果があったのか）や課題などについて論じているものが多い。また、金子、中西（2007）のように、幼老の交流ですれ違いや衝突が起きることをネガティブに捉える傾向がある。これらのことについてどう考えればよいか考察したい。

## 第4章 調査

### 第1節 調査概要

富山型デイサービスの「砺波地域福祉事業所 大空と大地のぼピー村（以下、大空と大地のぼピー村）」と「宗教法人専正寺デイサービスまごころ（以下、専正寺デイサービスまごころ）」2カ所へのインタビュー調査およびフィールドワーク調査を実施した。以下は詳細である。

#### 【インタビュー調査】

- ・宗教法人専正寺デイサービス まごころ

日時：2022年8月4日

施設代表者の久津谷俊行さんへインタビュー調査を実施

- ・砺波地域福祉事業所 大空と大地のぼピー村

日時：2022年12月5日、12月12日

施設代表者の宮崎弘美さんへインタビュー調査を実施

#### 【フィールドワーク調査】

- ・砺波地域福祉事業所 大空と大地のぼピー村

2021年12月22日に施設見学を実施、2022年7月から2023年1月まで有償ボランティアとしてフィールドワーク調査を実施

- ・宗教法人専正寺デイサービス まごころ

2022年11月30日、2022年12月7日に施設見学を実施



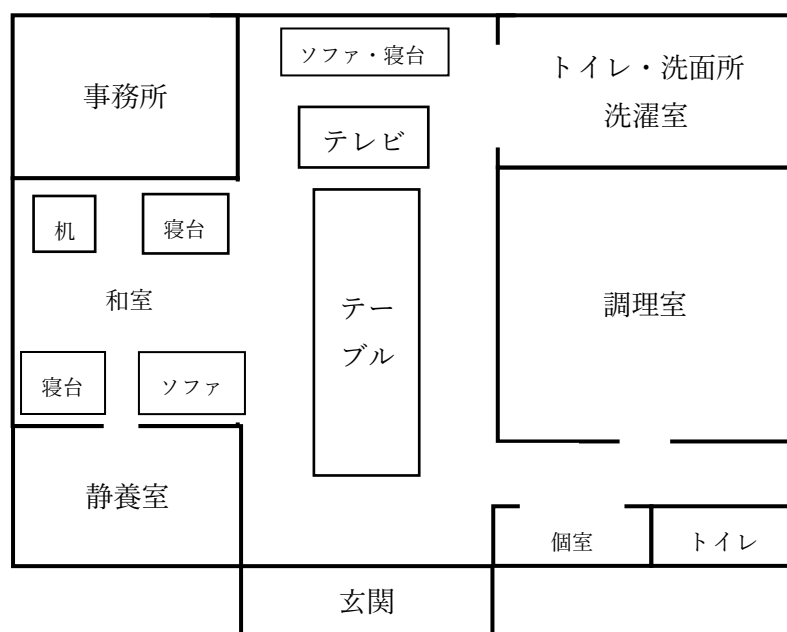
## 第2節 砺波地域福祉事業所 大空と大地のぽぴー村

### 第1項 施設概要

|       |                                                     |
|-------|-----------------------------------------------------|
| 運営主体  | 砺波地域福祉事業所 大空と大地のぽぴー村                                |
| 実施事業  | 通所介護、生活介護、放課後等デイサービス、日中一時支援、児童発達支援、乳幼児の一時預かり、地域への開放 |
| 施設利用者 | 高齢者、障害者、障害児                                         |

### 第2項 空間的な特徴

施設は、古民家を改装した建物である。内部は家庭的な雰囲気、利用者がくつろげる空間となっている。リビングには、4メートル程のテーブルが中心に置かれ、テーブルの左右にはいくつも椅子が並んでいる。また、リビング奥や、和室などあちこちにソファやベッドが置かれている。和室や個室には子ども用のおもちゃが置かれていて、子どもたちが遊びに部屋を使うことがある。施設は、部屋の仕切りがほとんどなく、和室の襖や個室のドアなども普段から解放しているため、リビング、和室、個室はひと続きの部屋のようにあり、開放的な空間である。以下は、施設全体を上から見た平面図である。



### 第3項 利用者の特徴

1日当たり、高齢者は8~10人程、子どもは6~9人程の利用がある。子どもは皆、障害児である。障害のある子どもは、排泄や食事などスタッフの補助が必要な場合がある。障害児は、平日は、学校が終わってからスタッフの送迎で施設に着き、保護者が迎えに来るまでの間、数時間程施設で過ごしている（小学校低学年の子どもは14時30分頃から、小学校高学年は16時30分頃から大抵17時頃まで施設を利用する）。休日や長期休暇期間は朝から施設を利用している。高齢の利用者は要介護度1以上で、排泄、食事、入浴、歩行などの際にスタッフの介助が必要である。皆認知症であり、程度は軽度から重度まで様々である。高齢の利用者は個別に送迎の時間を調整しているため、施設を利用する時間帯は様々であるが、朝9時から16時まで施設を利用する場合は比較的多い。

### 第4項 1日の流れ

平日の流れを説明する。朝8時15分から9時半までは高齢の利用者と障害者の送迎が行われる。9時から入浴。高齢の利用者はスタッフが1人ずつ介助して入浴する。入浴しない高齢の利用者は、パズルや塗り絵をしたり、テレビを見たりして過ごす。10時からテレビ体操。12時から13時までは昼食。13時から15時までは自由時間で高齢の利用者は昼寝をする人が多いが、起きている人もいる。14時30分頃になると小学校低学年の子どもたちが施設に来る。15時頃、高齢の利用者が昼寝から目覚め、おやつを食べる。16時頃から高齢の利用者や小学校低学年の子どもが帰ったり、小学校高学年以上の子どもが施設に来たり、利用者の入れ替わりが続く。17時になると利用者は数人残っている（小学校高学年の男の子と高齢の利用者それぞれ1~2人程が残っている場合が多い）程度。休日や子どもの長期休暇期間は、朝から子どもが施設を利用することがある。以下は1日の流れを示した表である。

平日の1日の流れ

|        | 子ども      | 高齢者      |
|--------|----------|----------|
| 8:30~  | 学校       | 送迎       |
| 9:00~  |          | 入浴、自由時間  |
| 10:00~ |          | 体操、自由時間  |
| 12:00~ |          | 昼食       |
| 13:00~ |          | 昼寝       |
| 14:00~ | 送迎       | 昼寝       |
| 15:00~ | おやつ、自由時間 | おやつ、自由時間 |
| 16:00~ | 帰宅       | 帰宅       |

## 第5項 利用者の過ごし方

施設での過ごし方は人それぞれである。大空と大地のぼピー村代表の宮崎弘美さんは、「日課があるようで無い、どう過ごすかは利用者自身が決める」と語る。

高齢の利用者は、食事や入浴、体操、昼寝の時間以外は、自由時間である。自由時間には、パズルや塗り絵、読書など思い思いの時間を過ごしている。時折、高齢の利用者数人でトランプやお手玉崩しなどのゲームをすることがある。ぼーっとしている人がいると、スタッフが「パズルや塗り絵でもする？」などと声をかけることがあるが、高齢の利用者の中には、何もせずぼーっとしているのが好きで、人が何かしているのをただ見ているだけでいいと主張する人もいる。

一方、子どもは施設に在る間は全て自由時間で、好きなことをして過ごす。例えば、おもちゃ遊びやアニメ鑑賞、ゲーム、工作、追いかっこなど。子ども同士やスタッフと遊ぶ子どももいれば、1人で遊ぶ子どももいる。スタッフが子どもたちに「宿題をしなさい」とか「これで遊びなさい」などと指示することは一切無く、子どもたちは施設でどう過ごすかを自分で決める。

このように、高齢の利用者と子どもとで過ごし方は違い、両者が一緒に何かするなどして交流する機会は少ない。しかし、以前は子どもたちと高齢の利用者たちが集まって一緒にトランプなどのゲームをしたり歌を歌ったりすることがあったそう。しかし、スタッフが、昨年から施設を利用し始めた子どもの対応に追われるようになったことをきっかけとして、交流の機会が無くなってしまったのだという。以下は宮崎さんの語りである。

宮崎さん：去年までは（子どもと高齢者が）一緒にゲームしたり歌を歌ったり、ものをつくったりしてたけど。トモくんとソウタくんが来たら「皆でやる？」っていうのは無くなったかな。あの2人が来るようになって、分けられるようになったんやね。暴れたりするからお互いに近づかなくなったね。それに男の子が、高齢者と一緒に交わるともたまにあるけど、いつも遊ぶ相手にはならんちゃね。抱っこしてもらおう相手にはなっても、私相手でもポケモンの話してもはー？って。分からないでしょ。

## 第2節 専正寺デイサービス まごころ

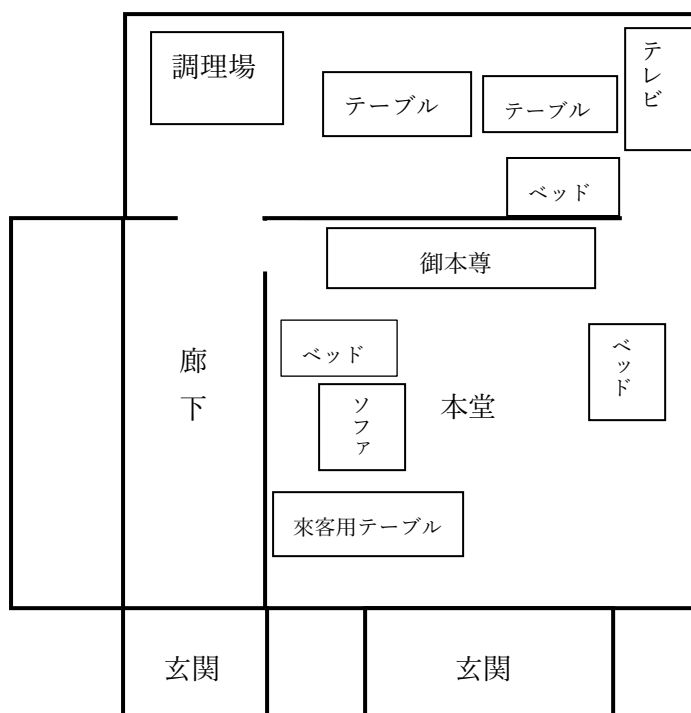
利用者の特徴や1日の流れ、利用者の過ごし方に関しては、大空と大地のぽぴー村と、ある程度同様のことが確認されたため省略する。

### 第1項 施設概要

|       |                                                                                         |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------|
| 運営主体  | 専正寺デイサービス まごころ                                                                          |
| 実施事業  | 地域密着型通所介護、居宅介護支援、生きがい対応デイ、放課後等デイサービス、生活介護、自律訓練、学童保育、乳幼児の一時預かり、送迎、入浴、食事、健康チェック、各種行事、生活相談 |
| 施設利用者 | 高齢者、障害者、障害児                                                                             |

### 第2項 空間の特徴

専正寺デイサービスまごころは、寺院を改修して開設した富山型デイサービスである。玄関を抜けると本堂がある。本堂は、畳敷きで広いスペースがある空間で、御本尊も置かれ参拝することができる。加えて本堂には、介護用のベッドやソファが置かれて利用者がくつろげるようなスペースもある。本堂の奥にある、庫裡（以下、リビング）は利用者がくつろげるようなリビングとして使用されている。子どもたちは広いスペースの本堂で遊んでいることがあったが、高齢の利用者はリビングでくつろいで過ごすことが多い。利用者は主にリビングと本堂の2部屋で過ごしている。以下は、施設全体を上から見た平面図である。



## 第5章 大空と大地のぽぴー村 エスノグラフィー

### 第1節 フィールドワーク初日を振り返って

高齢の利用者と子どもの交流の実態を明らかにするため、実際に子どもの利用者と高齢の利用者の受け入れを現在に至るまで行っていたいくつかの富山型デイサービスに調査の依頼を申込んだ。そして、2021年12月、依頼を快く承諾してくれた「砺波地域福祉事業所 大空と大地のぽぴー村」に見学させてもらえることになった。

当時、富山型デイサービスの存在は知っていたのだが、実際に現場に足を踏み込むことは初めてだったため、子どもと高齢者が共に過ごしている空間はとても新鮮な光景として目に映った。また、新鮮でありながらどこか懐かしさも感じていたように思う。

見学では「現場でどのような幼老の交流がなされているかを観察すること」を目的としていたので、私は子どもと高齢者が交流している様子をしかと目に焼き付けなければ！と張り切っていたのだが、予想していたよりも交流している様子はあまりなかった。少し残念なような、寂しいような。当時の私は、子どもと高齢者が同じ空間にいと交流が頻繁に生まれるものだと思っていた。高齢者は、多くの場合は子どもが好きだから積極的に関わろうとするのではないかと思っていたし、子どもも普段一緒に過ごしている高齢者には親しみをもって接しているのだろうと想像していた。実際は、ほとんどの子どもは子どもたちだけで遊んでいるし、高齢者はテーブルについて個人でパズルをしたり本を読んだり、思い思いの時間を過ごしている。同じ空間にいるものの、子どもは子ども同士で、高齢の利用者は高齢の利用者同士で固まっていて、見えない壁があるようだった。

同じ空間にいるからといって常に交流している必要はないのだなと自分を納得させると、小さな女の子と高齢の利用者（当時は未就学児のハナちゃんとアオキさん）が一緒におもちゃで遊んだり、絵本を読み聞かせたりしているではないか。これこれ！とばかりに私は交流の記録をするためメモをとりだした。実はこの時、幼老の交流を求める自分に対して本質と向き合っていないような違和感を抱いていたのだが、それが解消されるのはまだ先のことである。

その後、研究を進めるに当たってより詳しいデータを把握する必要があったため、2022年7月から2023年1月まで、大空と大地のぽぴー村でボランティアをしながら、フィールドワーク調査をさせて頂けることになった。継続的に現場に足を運ぶことで、交流の様子を間近に見つめることができるようになり、自分の交流についての捉え方も変化していったように思う。第2節以降では、そこで目の当たりにした高齢の利用者と子どもの交流について、エピソードやインタビューの語りを交えながら自分が感じ、考えたことを紹介したい。

## 第2節 変化していく関係

### 第1項 登場人物

以下、登場する利用者は全て仮の名前を使用している。

#### ・ハナちゃん

…小学1年生。ダウン症。平均的な小学校1年生と比べると背丈が小さく、高齢の利用者からは3、4歳と間違われることがある。話すことはできないが、知的レベルが高く、スタッフや高齢の利用者が言ったことを理解し、表情やジェスチャー（手で○×印をつくるなど）で返していることがある。また、ハナちゃんは「いたずらっ子」で、よくスタッフを困らせている。例えば、おもちゃを投げたり、勝手に玄関から出ていこうとしたりなど。いたずらをした時はスタッフや高齢の利用者が「ハナちゃん！だめでしょ！」と注意をするのだが、そこでハナちゃんが「へへっ」と愛嬌たっぷりに笑うと、皆呆れながらも許してしまうようだ。

#### ・アオキさん

…80代の高齢の利用者。要介護度は1で自立している印象。中程度の認知症がある。いつも穏やか。施設にはスタッフとして働きに来ていていると思っていて、以前はエプロンをして皿洗いや子どもの見守りをしていた。現在は認知症が進行して、スタッフの手伝いはあまりしなくなったが、ハナちゃんの見守りは数年前から続けている。ハナちゃんのことをよく気にかけていて、「ハナちゃんおいで！」と声をかけたり、和室に1人でいるハナちゃんを自分の席に連れて行こうとしたりすることがある。パズルや塗り絵をしたり、時々ハナちゃんと遊んだりして過ごすことが多い。

### 第2項 ハナちゃんとアオキさんの交流の様子

ハナちゃんは、普段は学校が終わると施設を利用する。施設では、1人遊びをして過ごしていることが多い。CDディスクや空きビンの蓋を使っておままごとのような遊びをしたり、チャイルドシートに座ってシートベルトの付け外しをして遊んだりなど、独創的な遊びをたくさん知っている。

ハナちゃんは1人で遊ぶのに飽きると、高齢の利用者のアオキさんの近くに行って遊んでいることがある。また、ハナちゃんが落ち着かない時には、スタッフがアオキさんの傍に誘導することもある。ハナちゃんはアオキさんの近くに行くと、アオキさんの膝の上に座って、おもちゃで遊んでいる。アオキさんは、ハナちゃんが傍に来るといつも嬉しそうだ。「これ何？」「面白いね～」など声をかけて、ハナちゃんを微笑ましそうに見守っている。ハナちゃんはアオキさんの言ったことに反応が無いことも多いが、アオキさんの顔を見て笑ったり、「うー」と嫌な顔をしたり、ジェスチャーを交えながらコミュニケーションをとって

いる。こうした交流は1日平均2～3回。1回の交流では3分～5分程でハナちゃんの興味が他に移り、アオキさんから離れていく。

また、ハナちゃんがアオキさんの傍に来ると、近くに座っている他の高齢の利用者たちもハナちゃんを見て笑顔になることがある。時々、ハナちゃんとアオキさん、タバタさんなど高齢の利用者数人で、じゃんけんをしたり、童謡を歌ったりするなど、交流の輪が広がることもある。

### 第3項 お世話焼きなアオキさん

数年来の付き合いをしているからか、アオキさんはハナちゃんに特別な親しみを持って接している。ハナちゃんが近くにいると声をかけたり、ハナちゃんの動向をよく気にしている。アオキさんにとってハナちゃんは、子どもたちの中でも特別な存在であることが伝わってくる。(例えば、名前を呼ぶ行為。アオキさんはハナちゃん以外の子どもを名前で呼ぶことは無い。)時々アオキさんはハナちゃんに対して、少し過保護なお世話をしようとする。

【エピソード1】ハナちゃんがおもちゃを床に落とした時のこと。アオキさんがすぐに椅子から立ち上がって落としたおもちゃを拾おうとすると、スタッフが「いいですよ、自分のこと自分でしますから」とアオキさんに声をかける。アオキさんは「そうけ…」と少ししょんぼりした様子で自分の席に戻る。そこで、スタッフは「もう小学1年生なのよ。自分のことは自分でせんなん。」とアオキさんをフォローした。しかし、アオキさんは納得しているのかどうか分からない様子だった。

このように、アオキさんがハナちゃんのお世話をしようとして、それが甘やかashiになってしまわないようにスタッフが制止する場面が何度か見られた。

このことについて、施設代表の宮崎弘美さんは「ハナちゃんは落としても自分で拾えるし。喋る喋らん、とか知的あるとかないとか関わらず、本人ができることはやらせる」と語る。施設では、障害のある子どもたちには挨拶や片付けをすることなど、社会で生活する上で必要なことを守るように教えている。

しかし、アオキさんはハナちゃんが1人でできることとできないことの判別ができず、大きな世話を焼いてしまうようだ。そのことについて、宮崎さんは「アオキさんは(ハナちゃんのことを)まだ小さい小さい赤ちゃんみたいな感じに思っとるから」と語る。アオキさんは、ハナちゃんを実年齢よりも幼く見ている。それはなぜか。ハナちゃんは、施設を利用し始めた頃と比べて確実に成長していて、1人でできることも増えたそう。しかし、アオキさんは、認知症の影響で過去と現在とで変化したことを感じにくい。(例えば、アオキさんは現在、家事を全くしていないそうだが、「家帰って料理せんなん」と言うことがある。)アオキさんの面倒見がよい性格も影響しているかもしれないが、このことも少なからず影響していると思われる。なアオキさんの目に映るハナちゃんは、まだ小さな頃のハナちゃん

のままなのかもしれない。

#### 第4項 スタッフは「大助かり」

第2項で、ハナちゃんはアオキさんの傍に自発的に行って遊んでいる場合もあれば、スタッフがハナちゃんをアオキさんのもとに誘導する場合もあると記述した。スタッフが誘導するのは、ハナちゃんが玄関から出ていこうとした時など落ち着かなくなった時が多い。誘導すると、しばらくの間はアオキさんがハナちゃんを見守っていてくれるので、宮崎さんは、「(アオキさんに) 大助かり!」と話している。

また、反対にアオキさんが落ち着かなくなった時にもハナちゃんを誘導することもあるそうだ。その場合は、ハナちゃんがアオキさんを見守っているという状況になるのかもしれない。(当人たちにその意識はないと思われるが…)

ハナちゃんとアオキさんは、一緒にいることでお互いが落ち着くことができ、それが忙しいスタッフの助けにもなっている。

#### 第5項 変化していく関係

宮崎さんから、ハナちゃんとアオキさんについて意外な話を聞くことができた。宮崎さんは「(ハナちゃんとアオキさんは) 昔はべったりやったけど、ハナちゃんが今は成長して自分で考えて、自分の好きな遊びをできるようになったからね、どんどんアオキさんから離れていっとる」「アオキさんの横に連れて行って、一緒に遊んどっても面白くなかったらすぐに逃げ出す」と話す。現在もハナちゃんとアオキさんは一緒に遊んでいて、仲が良さそうだが、以前は現在より「べったり」だったそうだ。それが、ハナちゃんが成長するにつれて、1人遊びを好んでするようになり、徐々にアオキさんから離れていくようになったという。これについて、ハナちゃんがアオキさんのことを嫌いになってしまったのかということそうではない。

施設では、ハナちゃんに限らず、他の障害のある子どもと高齢の利用者でも、このような関係の変化が過去に見られた事例があるそうだ。子どもは成長するにつれて、様々なことに興味を持って、自分で考えて行動できるようになる。その結果、高齢の利用者との遊びから1人遊びに興味に移り変わっていったのだと考えられる。宮崎さんは、このことについて「成長した証、それはそれでいいと思う」「成長とともに遊びも変わっていく。そんな中で一緒にやれることもあれば、1人で遊ぶこともあれば」と肯定的に受け止めている。

しかし、アオキさんにとってハナちゃんが離れていくのは寂しいことなのではないだろうか。

#### 第6項 変化していく関係、それでも

第5項で述べたように、ハナちゃんはアオキさんから徐々に離れていっているのだが、私は完全に離れているわけではないと思う。2人で一緒にいる時間が全く無いわけではないし、ハナちゃんからアオキさんに対して愛情が感じられることもある。(例えば、ハナちゃ



んが昼寝から起きた時、寂しかったのかすぐにアオキさんの膝の上に座って甘えていたことがあった。)

ハナちゃんは、アオキさんのことをどう思っているのだろう。ハナちゃんはアオキさんの横に誘導されると、大抵しばらくは遊んでいる。数分経てば、アオキさんから離れていってしまうのだが、すぐに離れていくことはあまり無い。単純にアオキさんと一緒にいると落ち着いたり楽しいと思えるからなのかもしれないが、ハナちゃんなりにアオキさんを気遣い、しばらく傍にいてあげている、ということもあるのかもしれない。実際、そう感じた瞬間があった。

【エピソード2】ハナちゃんがアオキさんと一緒に遊んでいた時のこと。ハナちゃんは、アオキさんから離れて、向かいに座っているナガサキさんに近寄り、隣の席に座ろうとした。その一瞬、ハナちゃんがアオキさんの方をチラリと見た。ナガサキさんは、ハナちゃんが童謡の本を持っているのを見て「歌ってあげるよ～」と本の歌を歌い始め、ハナちゃんもナガサキさんの歌に合わせて踊り出した。アオキさんもそれを見て微笑ましそうに笑っているが、少し寂しそうだった。

想像だが、ハナちゃんがアオキさんの方をチラリと見たのは、アオキさんが自分と離れて寂しいのではないかと心配する気持ちがあったからではないだろうか。このように、ハナちゃんがアオキさんに対して「一緒にいてあげたい」と思っていることはありそうだ。

では、アオキさんの方はどうか。アオキさんにハナちゃんについて話を聞いた時のこと。アオキさんは、「(ハナちゃんは)可愛くて、自然と遊んであげたくなるし、相手しとりたくなるね。だって、親と離れてここにほっかってかれて可哀想やないけ」「外へ出て川にでも落ちたりしたら、大変やから。ちゃんと見ておかんなんからね」と話していた。アオキさんは、ハナちゃんに対してただ「可愛い」「構いたい」という気持ちだけでなく、「親の代わりに自分が面倒を見なければいけない」という責任感や役割意識を持って接していることが分かった。また、「自然と遊んであげたくなるし、相手しとりたくなるね」という言葉から、それは、誰かの指示によるものではなく、アオキさんの中で自然と生まれたものであることが分かる。

ハナちゃんとアオキさんは、単純に「一緒にいると楽しいし、落ち着く」という気持ちもあるだろう。そして、「お互いが相手のために一緒にいてあげたい」という気持ちも持てる。数年来の長い付き合いをしているからこそ、お互いがお互いにとっての居場所であるような関係を築くことができたのではないだろうか。徐々に離れていく中でも、2人にとってお互いが大切な存在であるのは、今も変わらないように思われる。

### 第3節 優しい高齢の利用者

#### 第1項 登場人物

##### ・ユウカちゃん

…小学1年生。知的障害がある。特別支援学校に通っている。施設では、スタッフが見守りながら、アンパンマンのDVDや図鑑を見たりおもちゃで遊んだりして過ごすことが多い。ユウカちゃんは、話すことができないため、ジェスチャーや表情で意思表示をしている。色やアンパンマンのキャラクターの識別ができ、アンパンマンのDVDを見ている時はお気に入りのシーンが流れると、飛び跳ねて笑顔になるなど感情表現が豊かである。

##### ・ノバラさん

…80代の高齢の利用者。要介護2。車椅子を使用している。食事や排泄、歩行などでスタッフの介助が必要なことが多い。認知症が重く、ぼーっとして過ごしていることが多い。いつも穏やかでおっとりしている印象。

##### ・タバタさん

…90代の高齢の利用者。要介護度3。車椅子を使用している。手足が動きにくく、スタッフの介助が必要なことが多い。認知症は軽く、スタッフと会話で盛り上がったり、時折子どもに声をかけたりしている。気さくで笑顔が多い印象。

#### 第2項 ユウカちゃんを受け止めるノバラさんとタバタさん

高齢の利用者たちは、障害のある子どもに対して優しく接することが多い。そのように実感したエピソードを以下に紹介する。知的障害のあるユウカちゃんは、高齢の利用者の隣の席に座って、DVDを見て過ごすことがあり、その際に高齢の利用者との交流が生まれることがある。

【エピソード3】私がユウカちゃんの見守りをしていた時のこと。ユウカちゃんは、私の膝の上に座って、アンパンマンのDVDを見ていた。その時、隣の席にはノバラさんが座っていた。ユウカちゃんは途中、落ち着かなくなると、急にノバラさんの服の袖をぐいっと引っ張ったり、足をだらーんとノバラさんの膝へ投げ出したり、立ち上がってノバラさんの肩に身体を押し付けるようにして寄りかかったりした。そんな時、私はヒヤリとして、ユウカちゃんを制止するが、ノバラさんは嫌な顔1つしていない。ノバラさんは、ユウカちゃんの突然の行動に少し驚きつつも、すぐに笑顔で「どうしたか〜」と言う。

ユウカちゃんがノバラさんの膝の上に足を投げ出した時は、ノバラさんはユウカちゃんの足を触って「あらあ〜、大きい足しとるねえ〜」と驚いた様子で話した。私が「成長して

いるんですね」と返すとノバラさんは「成長したがや…」とまるで我が子のこのように感慨深げに頷いていたのがとても印象的だ。また、ユウカちゃんが急にノバラさんの肩に寄りかかった時、ノバラさんは、「ばあちゃんの膝の上乗っ取られ、おいで～」と言って、ユウカちゃんを膝の上に乗せていた。その他にも、ユウカちゃんが急にノバラさんの手を引っ張って、お気に入りの絵本を見るようせがんだ時も「ばあちゃんと絵本見るか～」と絵本を見ていた。

この時、ユウカちゃんとノバラさんの間で小さな衝突が繰り返し起きていたが、ノバラさんの包容力で喧嘩などの大きなトラブルに発展することは避けられていたように感じる。ノバラさんはユウカちゃんに足を投げ出されたりしても、とやかく言うことはなく、ただ優しく受け止めていた。

このようにノバラさんは、とてもおおらかで優しい印象がある人だ。しかし、家族に対しては意外な一面が見られることもあるという。以下は施設代表の宮崎さんの語りである。

宮崎さん：ノバラさんの娘さんが「お母さん、ちゃんと歩かな！いかんよ！」と無理に手を引っ張って歩かせようとしてノバラさんも「あんたうるさいがね！何言うとするが！」って言うがめちゃ。ノバラさんけ、これ。えー？みたいな。

家族に対しては特別厳しくなってしまうのかもしれないが、ノバラさんは誰にでも優しくするわけではない。そもそも、どんな状況でも、誰に対しても優しくできる人はいないだろう。無理に手を引っ張られるなど嫌なことをされたら、不快に感じるのは当然だ。そう考えると、ノバラさんがユウカちゃんにされたことは嫌ではなかったのだろうか。私は、ノバラさんはユウカちゃんにされたことを少なくとも不快に感じたが、すぐに許すことができたのだと考える。また、そのようにノバラさんが受容することができたのは、相手がユウカちゃんという小さな子どもだったからではないだろうか。

また、同様の事例として、タバタさんという高齢の利用者とユウカちゃんの交流を紹介したい。

【エピソード 4】和室で、私はユウカちゃんとアンパンマンの DVD を見ていた。その時、すぐ後ろのベッドでタバタさんが昼寝をしていた。ユウカちゃんはアンパンマンのお気に入りのシーンが流れると、笑って飛び跳ねたので、タバタさんが目覚めてしまった。すると、タバタさんは「子どもちゃそんなもんやから。わしの家にも（子どもが）おるさかい分かる」と笑っていた。

子どもが騒いだり暴れたりした時、タバタさんは、「子どもちゃそんなもんやから」「分かつとるよ」と口癖のように言う。ノバラさんと同様に、タバタさんも子どもの行動に対して

厳しい目を向けることはなく、優しく受け止めているように思える。タバタさんは「子どもちゃそんなもんやから」と言ったように、子どもが他人に対して十分な配慮をすることができないことを理解しているのではないだろうか。それに、悪気があっての行動ではないことも分かっているため、笑って受け止めることができたのだと考える。

また、ノバラさんもタバタさんも、ユウカちゃんに障害があることは知らないし、気が付いていない。よって、ノバラさんもタバタさんも、ユウカちゃんの多動性を障害によるものとしてではなく、年齢的な未熟さによるものとして受け入れていると考える。

子どもに優しくできる高齢の利用者にとって、子どもは大人の思い通りに行動しないことを分かっている。そうした奔放な面を含めて、十分に可愛らしいと思える存在なのかもしれない。

## 第4節 先入観を持たない高齢の利用者

### 第1項 登場人物

#### ・ユウカちゃん

…知的障害のある小学1年生。第3節第1項参照。

#### ・トモくん

…小学2年生。発達障害がある。特別支援学級に通っている。活発で、男子数名でゲームや戦いごっこをして遊んでいることが多い。

#### ・ミヤシマさん

…90代の高齢の利用者。要介護度3。車椅子を使用している。食事や排泄、歩行などスタッフの介助が必要なことが多い。認知症のため、何度も同じ話をしたり、話が噛み合わなかったりする。施設では、雑誌を眺めたり、知育玩具や糸巻きなど手先のリハビリをしたりして過ごしている。気さくでおしゃべり好き。

#### ・ヒダさん

…80代の高齢の利用者。要介護度2。認知症は軽く、スタッフの介助が必要なことは少なく、自立している印象である。施設では、パズルや塗り絵をして過ごしていることが多い。

### 第2項 先入観を持たないミヤシマさん

第3節では、障害のある子どもに対して優しい眼差しを向ける高齢の利用者の存在を紹介した。しかし、高齢の利用者が子どもに向ける眼差しは人によって様々で、全ての高齢の利用者が子どもに対していつも優しいとは限らない。

【エピソード5】私がミヤシマさんの横で、手先のリハビリのお手伝いをしていた時のこと。トモ君がテーブル近くを大きな足音を立てて走っている姿を見て、ミヤシマさんは「あら、きかんねえ」と少しムツとしたように言った。しばらくして、トモ君がテーブルについて静かにおやつを食べていると、今度は「あら、あの坊やかたい（良い子の意味）もんなっとる」と感心している様子で言った。

ミヤシマさんは子どもの判別がついていないため、この時、走り回っていた「きかん子」と静かにおやつを食べる「かたい子」が同じ子ども（トモくん）であることに気づいていなかったのかもしれない。それでも、私はミヤシマさんの、子どもにきかん時には「きかん」、かたいには「かたい」と言える素直さを心地良く感じていた。

子どもはきかん時もあれば、かたい時のこともある。しかし、子どもに対して問題のある行動をした時ばかりに注意を向けてしまうということはよくあるのではないだろうか。結果、よく注意されている子どもはきかん子という印象が強くなってしまうと思う。私自身も、トモ君に対してはきかん子の印象が強かった。しかし、思い返してみると、トモ君は時々暴れることもあるが、スタッフが注意したことを守ったり、友達と仲良くしたりなど素直で優しい、良いところもたくさんあることに気づいた。これまでの私は、それを良いところというより、当たり前のこととして捉えてしまっていた。だから、トモくんが黙っておやつを食べていることもいつものことだったので、私にとっては当たり前の光景として目に映っていた。しかし、ミヤシマさんにとって、子どもが黙っておやつを食べていることは、特別な光景として目に映ったのではないだろうか。そうでなければ、「かたいもんなっ」と感心することはなかったように思う。

子どもたちがやっていること、それがどんなに何気なく些細なことでも、そこには他人が想像しないような努力があるかもしれない。そうしたことを、当たり前のこととして捉え、目を向けないのではなく、時にはミヤシマさんのように褒めることも必要なのではないだろうか。ミヤシマさんの言葉を通して、私は子どもの行動 1 つ 1 つに、偏りなくしっかりと目を向けることの大切さを思い知らされた。

しかし、ミヤシマさんはなぜ子どもに対してこのように素直な視点を持つことができるのだろうか。もう 1 つのエピソードを紹介して考えたい。

【エピソード 6】私がユウカちゃんの見守りをしていた時のこと。ユウカちゃんの横にはミヤシマさんが座っていた。ミヤシマさんはユウカちゃんを見て、「可愛らしいねえ」とか「お母さんは？」と何度も話しかけていた。すると、ユウカちゃんは突然、ミヤシマさんが持っていた雑誌に手を伸ばし、ミヤシマさんから雑誌を取り上げようとした。しかし、この時ミヤシマさんは「あらあ、取ったらあかんよ～」とユウカちゃんをたしなめて、雑誌を決して渡そうとしなかった。

この時、実はミヤシマさんは雑誌を熱心に見ているわけではなかったし、その前には隣に座っていた私に「あんた、これ見られ」と何度も雑誌を渡していたので、その雑誌自体に執着していたわけではなかった。よって、ミヤシマさんは、ユウカちゃんが突然何も言わずに雑誌を奪おうとしたのがいけないことだと思い、雑誌を渡さなかったのだと思う。

ミヤシマさんは同じ子どもに対しても、褒める時には褒める、叱る時には叱ることができる。このように、ミヤシマさんは、「障害」に対する先入観を持たず、限りなくフラットに、1 人の子どもとして、障害のある子どもに接することができると言えるだろう。また、ミヤシマさんがこのように先入観を持たないで接することができる理由はいくつか考えられる。例えば、認知症で子どもが障害児であることを理解しにくいこと、障害があるかどうかに関心を持っていないこと、元々障害に関して馴染みが薄いことなどである。

認知症だから、高齢者だからと言えば、そこまで。（しかし、本当にそれだけなのかは疑問である。愛情や優しさ。目に見えないがそういうものがあると信じたい。）しかし、それが事実だとしても、私はそのように接することができるミヤシマさんは、とても貴重な存在だと思う。なぜなら、私はフィールドワークを通して、障害のある子どもに対して先入観を持たないで接することの難しさを痛感していたからだ。特に、障害のある子どもが問題行動をした場合は、特性上、仕方がない部分もあるのではないかと遠慮してしまい、注意すべき時に注意できなかったということがよくあった。だから、タカシマさんがさりとやっていたことは、私にとって本当に凄いことなのだ。

昔と比べて障害に対する認知が広まってきている今の社会において、障害に関して様々な先入観を持つ人は多いのではないか。だからこそ、ミヤシマさんのように、障害のある子どもに対して先入観を持たない高齢の利用者の存在は貴重なように思う。

### 第3項 障害児と知っているヒダさん

第2項では障害のある子どもに対して先入観を持たない高齢の利用者の存在を紹介した。しかし、全ての高齢の利用者が障害のある子どもに対して先入観を持たないわけではない。

【エピソード7】私がリビングでユウカちゃんの見守りをしていた時のこと。ユウカちゃんは私の膝の上に座って足をテーブルに投げ出し、アンパンマンのDVDを見ていた。すると、向かいの席に座っていたヒダさんはその様子を見て「あら、大変やねえ。ハナちゃんならまだいいけどこの子は…」と呟いた。

発言からも分かるようにヒダさんは、ユウカちゃんが障害児であり、障害の程度がハナちゃんとは違って重いものだと理解しているようだ。しかし、ヒダさんの悪気ないと思われる発言に、その時私はモヤモヤした気持ちになってしまった。しばらくして、私はヒダさんに対して、その時伝えたかったことがあったことが分かった。ハナちゃんとは比べると、落ち着きがなく、突発的な行動も目立つユウカちゃん。静かにアンパンマンのDVDを見ているとえらいなと思うし、楽しいときは飛び跳ねて笑ったり、悲しいときは「うわー」と泣いたりする素直なところは可愛らしいと思う。ヒダさんには、そうした部分にもっと目を向けて欲しかった。しかし、先入観を持たないで接することの難しさを私は身をもって知っているため、ヒダさんの捉え方も仕方ないとも感じている。

同じ高齢の利用者といっても、このように、障害のある子どもに対する見かたは違う。ミヤシマさんのように、子どもが障害児であることを理解していない人もいれば、ヒダさんのように、子どもが障害児であることを理解している人もいるため、子どもに対する見かたが違うのは当然なのだが、だからこそ、ミヤシマさんのような子どもを障害児という先入観で見ない高齢者の利用者の存在は貴重であるように思える。

## 第5節 配慮する子どもたち

### 第1項 登場人物

・トモくん、ソウタくん

…2人とも小学2年生。発達障害があり特別支援学級に通っている。2人とも活発で、子どもたちでゲームや戦いごっこなどをして遊んで過ごしていることが多い。

### 第2項 高齢の利用者に配慮するトモくんとソウタくん

第3節、第4節では高齢の利用者の子どもに対する眼差しについて中心的に紹介したが、ここでは高齢の利用者に対する子どもの眼差しについて考えようと思う。

【エピソード8】トモくんとソウタくんが和室で遊ぼうとした時のこと。その時、和室には高齢の利用者2名が昼寝をしていたため、スタッフが「静かに遊んでね」と2人に伝えた。すると、トモくんとソウタくんは和室の隅の方に行って、自分たちを囲むようにして、椅子を並べた。そして、椅子の背もたれにいくつか座布団を立てて置いた。まるで、バリケードのようである。その後の2人は、高齢の利用者の昼寝が終わるまで、一畳程のスペースしかないバリケードの内側でこそこそと遊んでいた。

このように、施設では子どもが昼寝をしている高齢の利用者たちを気遣い、静かにしている様子がよく見られる。施設を利用する全ての子どもがそうした配慮ができるわけではないのだが、トモくんとソウタくんのように、高齢の利用者に対して配慮しなければならないことを理解して行動する子どもたちもいるのだ。

また、直前にスタッフがトモくんとソウタくんに「静かに遊んでね」と伝えたように、配慮が必要な時はスタッフが注意を呼びかけることも多い。(例えば、高齢の利用者が子どもの近くを通る時には、スタッフが「ばあちゃん通るから避けてね」と子どもに声をかけることがある。) このように高齢の利用者に対して配慮する子どもの背景には、注意をするなどしてアシストをするスタッフの存在があることが考えられる。

ただし、この時、スタッフはトモくんとソウタくんに対して「静かに遊んでね」と言ったただけだったのだが、2人は椅子と座布団でバリケードまで作っていた。これには彼らなりの配慮が感じられる。このように、スタッフが教えなくても子どもたちが自然と高齢の利用者に対して配慮していることがあるのではないだろうか。

こうした自分なりの配慮を子どもたちは、どのようにして身に付けるのだろうか。そのことについて、大空と大地のぼび一村代表の宮崎さんは以下のように語る。

宮崎さん：(子どもは) いろんな人がおることが分かると思うがいちゃ。高齢者とか障害者とか。中には嫌がったり子もおるかもしれんけど、仲良くせんなんよということは分かっとなる。高齢者



にはぶつかったらダメやということも分かつとるから、ぶつかったことは（これまで）本当に無いし。高齢者の周りを走り回することはあってもね。

私：そこは自然と察して、という感じですか。

宮崎さん：そう。そこは私も富山型（デイサービス）を始める時は心配してたんだけど。多分身についとるがやないかね。弱い人にぶつかったり、たたいたりしてはいけないとか。皆の行動を、人を（子どもは）見てると思う私は。

施設で過ごす様子を見てみると、子どもは高齢の利用者に対して関心が薄いように感じるのだが、宮崎さんの語りから、全く関心を持っていないわけではないことが分かった。トモくんやソウタくんは、高齢の利用者が車椅子や歩行器を使っていたり、スタッフに介助されていたりする姿を見るうちに、「配慮が必要な人」であることを理解し、実践するようになったのだろう。スタッフのアシストもありつつではあると思うが、子どもは高齢の利用者と同じ空間で過ごす内に、自然と見聞きし、感じ学んでいることは多くあるのではないだろうか。子どもたちの何気ない行動には、施設で過ごすうちに培った、たくさんの学びが隠されているのかもしれない。

「配慮が必要なことを理解すること」と「実際に配慮できること」は違う。家庭や学校で「高齢者に配慮すること」をいくら教わったとしても、実際に直面した時に、行動できるとは限らない。富山型デイサービスで過ごす子どもたちは、普段から施設で実践の場を踏むことで、自然な配慮ができるようになるのではないだろうか。

このように子どもが高齢の利用者に対して「配慮すること」は思いやりの気持ちの表れだと考える。よって、子どもたちも高齢の利用者に対して優しい眼差しを向けていることがあると言えるのではないだろうか。これまで論じてきたことは、全ての子どもと高齢の利用者に通じるとは言えない。それでも両者は、時にはぶつかり合いながら、時にはお互いに思いやり合い、助け合うことができる、そんな関係を築くことも不可能ではないと考える。

## 第6章 専正寺デイサービスまごころ エスノグラフィー

### 第1節 フィールドワーク中盤を振り返って

2022年8月、専正寺デイサービスまごころに訪問し、施設代表の久津谷俊行さんへインタビューを実施した。当時、いくつかの富山型デイサービスへインタビューを実施していたのだが、専正寺デイサービスまごころは、寺院の中でデイサービスを開いていて、厳かでありとても温かな雰囲気が印象的だったこともあり、2022年12月に再度見学の依頼を申込み、2回に渡って交流の様子を見学させて頂けることになった。

フィールドワークでは、大空と大地のぼびー村ではほとんどなかった、大人数での幼老の交流が見られた。そこでは、子ども（タカちゃん、第2節参照）を中心となってあたたかい空間が生まれていた。かつての私なら「これが理想の交流だ！」と思ったかもしれない。しかし、この時の私は、大空と大地のぼびー村でのフィールドワークの経験から、交流を良し悪しで表面的に判断することは止め、交流をできるだけ当事者たちの視点に立って捉えてみようとしていた。また、この時には、大空と大地のぼびー村に初めて行った頃（第4章第1節参照）のような、自分に対する違和感を抱くこともあまり無くなっていたように思う。

専正寺デイサービスまごころでは、継続的なフィールドワークは実施できなかったため、利用者についての情報など大空と大地のぼびー村のエスノグラフィーと比べると不足している部分もあるが、2回の見学を通して感じたことを紹介しようと思う。

## 第2節 ムードメーカー

### 第1項 登場人物

以下、登場する利用者は全て仮の名前を使用している。

#### ・タカちゃん

…小学1年生。脳性麻痺がある。特別支援学校に通っている。2年前から施設を利用している。施設では高齢の利用者たちと一緒に過ごすことが多い。愛嬌があり、誰に対しても人見知りせず社交的。ほとんど話すことはできないが、特定の言葉やジェスチャーを使って意思表示をしている。手足が動かしにくく、歩行する際などスタッフのサポートが必要なことがある。

#### ・ムライさん、カネさん、ハラダさん

…90代の高齢の利用者たち。皆、要介護度1で中程度の認知症がある。

### 第2項 タカちゃんと高齢の利用者の交流の様子

専正寺デイサービスまごころでは、タカちゃんという皆に愛されているアイドル的存在の男の子がいる。タカちゃんは、学校が終わってから施設に来ると大抵、リビングで高齢の利用者たちと神経衰弱や風船バレーなどをして遊んでいるという。神経衰弱は、タカちゃんのお気に入りの遊びで、よくリクエストをするそうだ。フィールドワークでは、リビングで、高齢の利用者5～6名とタカちゃん、スタッフがテーブルを囲んで神経衰弱をしている様子がみられた。1人ずつ順番にカードを取っていくのだが、タカちゃんの出番になると、高齢の利用者たちはタカちゃんの様子をじーっと見守りながら、「次タカちゃん」「もう1枚!」「カードめくんなさい!」などと声をかける。タカちゃんは、テーブルの真ん中にゆっくりと手を伸ばしカードを取る。2枚とも違う種類のカードであることが分かると元の場所に戻す。タカちゃんがカードを上手く掴めない時や、カードに手が届きにくい時はスタッフが「これにする?」と聞いて、タカちゃんが頷いたり、首を振ったりしてカードを取る。タカちゃんは自分の番が終わると、高齢の利用者たちがカードを取る様子を椅子の上で正座をして、じーっと見つめている。時々「うー」と言ったり「もう1回!」と言ったりして、高齢の利用者の様子を見て楽しそうにしていた。タカちゃんも高齢の利用者たちもゲームを楽しんでいたように思う。ゲームが終わってから高齢の利用者が帰宅するまでの間、タカちゃんは高齢の利用者たちと一緒におやつを食べたり、高齢の利用者たちとチラシでゴミ箱を作ったりして過ごしている様子が見られた。

### 第3項 ムードメーカーのタカちゃん

フィールドワークで、専正寺デイサービスまごころ代表の久津谷俊行さんが「高齢の利用者さん同士の関係性は難しい」と語ったことがあった。私はそのことを不思議に思ったが、その後しばらくして実感することになった。

【エピソード 9】 高齢の利用者数名とタカちゃんが神経衰弱をしていた時。神経衰弱に参加している高齢の利用者のカネさんは、自分以外の人がカードを取る番になると「もう1枚！」や「違う！」と大きな声を出している。少し高圧的な感じで、カネさんの近くに座っているムライさんは萎縮しているようだった。ムライさんは、カードを取る動作がゆっくりで「次あなたの番でしょ！」と急かされていた。すると途中、ムライさんが「私、もういいわ」と言ってゲームに参加するのを止めることになった。ムライさんは、他の利用者に急かされるのが嫌だったのかもしれない。スタッフはムライさんに「無理にやらなくていいよ、椅子に座って見てて」と言う。

高齢の利用者同士の関係は一見良好のように思われた。しかし、神経衰弱をする時など、複数人で活動する際は、利用者同士の関わりの難しさが感じられた。この時、実際にムライさんが嫌な気持ちだったのかどうかは分からないが、途中でゲームを止めたのは他の利用者の影響が大きいのではないだろうか。

そうした高齢の利用者間の関係性の複雑さも伺える一方で、高齢の利用者たちの間で一体感が生まれ、場が盛り上がる瞬間も見られた。そうした場面は、主にタカちゃんをきっかけとして生まれていた。

【エピソード 10】 神経衰弱をしている時、タカちゃんの番になると高齢の利用者たちは、タカちゃんに釘付けになっていた。タカちゃんがカードを取りやすいよう、カードを近くに寄せたり、「タカちゃん！」「カードを見せて！」と声をかけたりして、その場に一体感が生まれる。タカちゃんが初めて同じカードを2枚当てた。すると、「タカちゃん当たったー！」と周りがわーっと盛り上がった。高齢の利用者たちは「良かったねー」と嬉しそうだ。ムライさんは初めて拍手をしていた。

タカちゃんがカードを当てた時の様子を紹介したが、他的高齢の利用者がカードを当てても、このように盛り上がることはあまりない。高齢の利用者たちがタカちゃんのためにカードを寄せたり、声をかけたりなどしていることから、高齢の利用者たちにとって、タカちゃんは特別な存在なのだと感じられる。同様のエピソードをもう1つ紹介したい。

【エピソード 11】 利用者たちがおやつを食べ終えてゆっくりしていた時。タカちゃんがハラダさんとイイダさんの間に座っていた。ハラダさんとイイダさんは、タカちゃんに「遊び

おもしろかったね～」とか「今日は誰迎えに来るの？」とか「可愛いね～、本当にうちの孫と一緒に！」と笑顔で声をかけている。タカちゃんもつられて笑顔になっている。しばらくすると、ハラダさんとイイダさんの間に座っているタカちゃんをきっかけとして、2人の会話が弾んでいた。タカちゃんの姿が重なるのか、お孫さん関連の話が多い。ハラダさんが「うちの孫、男の子なんだけどね～」と延々と話し、イイダさんが「うんうん」と相槌を打っている。

このように、タカちゃんがいることで、高齢の利用者間の会話が活発になるなど、場の雰囲気明るくなったことがあった。タカちゃんは特別なことをしなくても、高齢の利用者たちから自然と注目を集めて可愛がられるムードメーカーだ。改めて、タカちゃんが高齢の利用者に与える影響力の強さが感じられた。

#### 第4項 タカちゃんの障害について高齢の利用者たちはどう感じているのか

第2項、第3項で紹介したタカちゃんと高齢の利用者たちの交流の様子から、タカちゃんが高齢の利用者たちに愛されていることが伝わっただろうか。そこで気になるのは、高齢の利用者たちはタカちゃんの障害のことを、どのように受け止めているかである。

【エピソード12】タカちゃんと高齢の利用者たちが神経衰弱をしていた時のこと。タカちゃんは人がカードを当てている様子を見て、「うー」と嬉しそうに大きな声を出していた。その様子を見たキベさん（高齢の利用者）は「やかましい、やかましい」とおかしそうに呟いていた。すると、神経衰弱に参加せず、ベッドでぼーっとしていたムライさんが「タカちゃん勝つとる？」とタカちゃんの近くにやって来た。タカちゃんはムライさんに気づかず、奇声を出し続けている。ムライさんは「はははっ、この子、奇声を発するからね」とタカちゃんの元気な様子に安心しているようだった。

神経衰弱の途中、タカちゃんは何度も奇声を出していたが、高齢の利用者たちは笑顔で受け止め、あまり気にしていない様子だった。上記に関して、キベさんはタカちゃんの奇声に対して「やかましい、やかましい」と言うのだが、とても穏やかな口調で言い、不快に感じている様子は無かった。また、ムライさんは「この子、奇声を発するからね」という発言をしていたのだが、嫌みのような感じは無く、笑い飛ばしていた。このことからキベさんとムライさんは、タカちゃんを変った子どもとして認識しているが、障害についてネガティブな偏見を持っていないように思われる。

また、キベさんとムライさんの2人に限らず、多くの高齢の利用者たちはタカちゃんの障害を気にしていないことがフィールドワークを通して感じられた。このことについて、施設代表の久津谷さんも「お年寄りの皆さんは、タカちゃんに障害があることには気づいていないんじゃないかと思います。でも、お年寄りにとってタカちゃんは小さい子どもさ

んで、おまけに可愛い。(タカちゃんの可愛がられ様は)天性のもんやと思いますよ。だから皆に好かれている」と話していた。

私は、タカちゃんの奇声について障害の特性が大きく表れているように感じるが、高齢の利用者たちはそのことにあまり反応を示さない。高齢の利用者たちはタカちゃんと施設で過ごすうちに「慣れ」てしまったのか、私は最初そう思った。しかし、そういうわけでもなさそうだ。スタッフ曰く、高齢の利用者の中には、タカちゃんのことを「いつも来ている子ども」と覚えている人もいれば、会う度に「新しく入ってきた子ども」のように接するなど、タカちゃんのことをはっきりと覚えていない人もいるという。そんなタカちゃんのことを覚えていない高齢の利用者も、タカちゃんが奇声を発してもあまり驚いている様子はないため、「慣れ」とは少し違う気がする。また、代表の久津谷さん曰く、高齢の利用者とタカちゃんが初めて対面した時も、高齢の利用者たちはタカちゃんに障害があるかどうかを聞いたり、差別的な発言をしたりすることは一切無く、すぐに受け入れていたのだという。これらのことから、高齢の利用者たちは、タカちゃんの障害の特性を「気にする程のことではないこと」として認識しているのではないだろうか。

### 第3節 スタッフの助けになる高齢の利用者

#### 第1項 登場人物

・タカちゃん

…脳性麻痺のある小学1年生。第1節第1項参照。

・ムライさん、カネさん

…90代の高齢の利用者たち。第1節第1項参照。

#### 第2項 お世話をするカネさんとムライさん

フィールドワークでは、高齢の利用者たちが積極的にタカちゃんのお世話をする様子が見られた。その様子について紹介したい。

【エピソード 13】おやつの時間になると、高齢の利用者とタカちゃんにスナック菓子が入った小皿とお茶が出された。タカちゃんは、小皿が配られるとすぐに皿の中のスナック菓子を手で掴み、口に入れた。その様子を見たカネさんが「タカちゃん！いただきますしよう！」と大きな声で笑って言う。タカちゃんは、カネさんの方を見て「うーっ」と笑っている。カネさんは「せんべい戻して、手合わせよう！」とニコニコして言い、自分で手を合わせて見せている。タカちゃんはそれを見て笑っている。それでもカネさんは、「タカちゃん、いただきます！」と何回も言った。すると、しばらくしてカネさんの言ったことが伝わったのか、タカちゃんは手に持っていたスナック菓子を皿に戻して、グーで手を合わせた。カネさんは「そうそう！」と笑って頷いていた。

私は、カネさんがタカちゃんに「いただきますしよう！」と言った時、タカちゃんは既に食べ始めていたので、できないもしくは普段からしないのではないかと思った。しかし、カネさんはそんなことを気に留めない様子で、タカちゃんに「いただきます」を教えた。しかも、タカちゃんができるまで何度も言って。この時のカネさんは、タカちゃんが出来るか出来ないとかは関係なく、「タカちゃんのために」それだけだったのだと思う。私は、この時も自分がタカちゃんに対して先入観を持ってしまっていたことに気が付いた。できるかどうかはやってみないと分からないのだ。

また、カネさんがタカちゃんに「いただきます」をするよう教えたことは、結果的にスタッフの助けになっているのではないだろうか。もう1つ類似したエピソードを紹介したい。

【エピソード 14】ムライさんがタカちゃんに近づいてきて、タカちゃんの首に抱きつく。「タカちゃん～」と頭を撫でている。ムライさんは服の首元が濡れているのに気づき、「服が濡れてるよ。何か飲んだときにこぼしたんじゃない？大丈夫？」と言う。すると、近くに

いたスタッフが「さっきお茶飲んだときにこぼしたんやね」とタオルを持ってきて、タカちゃんの首元に前掛けのようにして巻いた。

この時、ムライさんがタカちゃんの服が濡れていることを指摘したことで、スタッフがタオルを持ってくることができた。エピソード 13 で紹介した、カネさんがタカちゃんに「いただきます」を教えたことも同様に、このように高齢の利用者が子どものお世話をすることは、結果的にスタッフの助けになっていると言えるのではないだろうか。子どものしつけやお世話はスタッフの役割でもある。しかし、スタッフは高齢の利用者の介助や記録作業なども並行して行わなければならないため、子どもに付きっきりで見守りをするのは難しい。そこで、積極的に子どものしつけやお世話をする高齢の利用者は、忙しいスタッフにとって助かる存在のように思われる。

一般的に子どものしつけやお世話をするのは、家族や学校の先生、施設のスタッフであることが多い。そうした役割を、カネさんやムライさんは誰に指示されることもなく自発的にこなしていた。もしかすると、本人たちにとって、しつけやお世話をしている感覚や役割といった意識は無いのかもしれない。それでも、このように他人の子どもに対して、自然と親身になって振る舞うことができるのは、特別なことのように感じる。



## 第4節 衝突は問題か

### 第1項 登場人物

#### ・ケイクン

…未就学児。5歳。自閉症と軽度の知的障害がある。施設では、おもちゃで遊んだり、ベッドで横になっている高齢の利用者の布団の中に潜り込んだりして遊んでいることが多い。

#### ・ムライさん

…90代の高齢の利用者。要介護度1。中程度の認知症がある。

### 第2項 ケイクンとムライさんの交流の様子

第2節、第3節では、タカちゃんと高齢の利用者たちを中心に取り上げたように、施設を利用する子どもたちの中では、主にタカちゃんを中心となって高齢の利用者たちと交流していることが多いが、ケイクンという男の子も高齢の利用者と交流している様子が見られた。ケイクンは、よくリビングのベッドで横になっている高齢の利用者の布団の中に潜り込んで遊んでいるのだという。

【エピソード 15】タナカさんがベッドの上に座り、毛布を膝の上にかけてぼーっとしている。すると、ケイクンが、ベッドに向かって走ってきて、ムライさんのひざ掛け毛布の中に潜り込んだ。ケイクンは毛布の中で体をジタバタさせて、笑っている。ムライさんは、「じーっとしてな」と穏やかな口調で言う。それでも、ケイクンは毛布の中で体をバタバタと動かしているので、ムライさんは「じーっとしてなって言ってんのに」と言った。少し呆れているようだった。

すると、ケイクンは、何かを思いついたようにベッドから飛び出して行き、またすぐに走って戻って来た。手には小さなブロックが沢山入ったおもちゃ箱を持っている。ケイクンはムライさんの横でロンドン橋の歌を口ずさみながら、ブロックで電車のようなものをつくらせている。ムライさんは「これ何？」と話しかけてもケイクンは返事をせず、完全に自分の世界に入っている。

すると、ムライさんは「この子は迷子じゃないの？私もう帰らなきゃいけないんだけど、大丈夫かしらね、この子」と私に訴えた。近くにいたスタッフが、「大丈夫ですよ、ちゃんと親御さん迎えに来ますから～」と言うと、ムライさんは「そう、私が帰っちゃうから心配で」と言った。

しばらくして、ケイクンはまたまたベッドから飛び出し、今度は洗濯バサミを持って来た。ケイクンが洗濯バサミで遊んでいるのを見たスタッフが「ケイ！それ貸して！手、挟んじゃうから危ないでしょ！」とケイクンに洗濯バサミを渡すように言った。しかし、ケイクンは

「やだもん～」と言って遊び続けるので、スタッフはケイクンから洗濯バサミを取り上げた。すると、ケイクンは洗濯バサミを没収されたことに納得がいかず、怒ってベッドの近くに重ねて置かれていたブランケットや座布団をいくつも引っ張り出し、ムライさんの上に投げつけるように放り出した。スタッフは、「ケイ！ばあちゃん困ってるよ！」とケイクンを叱った。ムライさんは「ばあちゃん埋もれて死んじゃうよ～」と言った。ムライさんは少し驚いているようだったが、ケイクンを咎めるようなことは無かった。私は、ムライさんの膝の上に投げ込まれたブランケットや座布団を元の場所に返し、「ムライさん、すみません」と言った。

### 第3項 衝突は問題か

ケイクンがムライさんにものを投げつけたことは衝撃的な出来事として私の目に映った。しかし、現場のスタッフは平静で、誰も私のようにムライさんに「すみません」などと謝ってはいなかった。私は、ケイクンの行動がムライさんをとて不快にさせてしまっているのではないかと先回りして想像していた。しかし、ムライさんはケイクンに対して怒るわけでも叱るわけでもなかった。そのため、あまり不快に感じてはいなかったのかもしれない。現場では、ケイクンの問題行動は自然なことのよう受け入れられていたように思う。

施設では、このように障害のある子どもが問題行動を起こすことは少なくない。そのような時、高齢の利用者はどのような反応を示すことが多いのだろうか。このことについて、代表の久津谷さんはインタビューで以下のように語った。

久津谷さん：以前、身体障害の子が大声を出して自分の存在を主張することがあって。その時、高齢者が「うるさいな」と言ったり、眉間に皺を寄せることがあったんだけど、懲り懲りだと言う方はいらっしゃらなかったね。注意はするけど仕方がないというか。

久津谷さんの語りからも分かるように、高齢の利用者は、障害のある子どもが起こす問題行動に対して寛容な傾向がある。注意をすることはあっても、必要以上に責め立てることはない。そのような高齢の利用者は、子どもの問題行動を即座にネガティブなこととして決めつけるのではなく、子どもの気持ちや行動を起こした背景を汲み取っているのかもしれない。

私はこれまで、障害のある子どもと高齢の利用者との間で、衝突が起きてしまうこと自体をネガティブなこととして捉えてしまっていた。確かに、ケイクンの「人に物を投げつける」という行動だけを切り取るとよくないことである。しかし、ケイクンの洗濯バサミを取り上げられ腹が立っているという気持ちを汲むと、行動を起こしてしまう気持ちも分かる気がする。私は、衝突を当事者の行動だけに注目しそこで完結して捉えるのではなく、当事者たちの気持ちも汲んだ上で捉えることを大切にしなければいけないと思った。目の前で起きていることが、目に見えることばかりで現れているとは限らない。

注意したいが、こうした衝突から大きな事故やトラブル（どちらかが怪我をするなど）に発展した場合は、問題になると考えられる。そのため、一概には、現場で障害のある子どもの問題行動が自然に受け入れられていると言うことはできない。

#### 第4項 ケイクンはムライさんをよく見ていた？

第3項では、ケイクンの問題行動が皆に受け入れられていたことを紹介した。この場合、ムライさんが優しくかったから問題にならずに済んだのであって、他の高齢者では大きな喧嘩など事故やトラブルに発展していた可能性もあるという見方もあるだろう。しかし、そもそもケイクンは、ムライさんが優しい人で、ブランケットを投げつけても怒らないことをちゃんと理解していたのではないだろうか。ケイクンはムライさんの言ったことに無反応だったし、ムライさんと一緒に遊んでいたわけでもなかったのも、私は最初、ケイクンはムライさんのことを全く気にしていないように見えた。しかし、振り返ってみると、ケイクンは、ベッドに来る時は毎回ムライさんの足を踏まないよう気をつけて跨いでいたし、ムライさんにぶつからないようにおもちゃで遊んでいた。ケイクンは、ムライさんのことを全く気にしていなかったわけではなく、むしろ配慮していたりもしたのだ。

私は、ケイクンがムライさんのことをちゃんと見ていたことに気づき、驚いた。しかし、そもそも、自分の近くにいる高齢の利用者の存在を子どもが全く意識しないでいることはあり得ないのではないかと考える。そう考えると、ケイクンがムライさんのことをちゃんと見ていたことは、ごく自然なことなのかもしれない。

以前、大空と大地のぼびー村の現場で障害のある子どもが高齢の利用者に対して、何かを察しているような場面を目の当たりにすることがあった。以下は関連したエピソードである。

【エピソード 16】 高齢の利用者のヒダさんがアンパンマンのパズルをしていた時のこと。ユウカちゃんがアンパンマンのパズルに興味を示し、パズルに手を伸ばした。ヒダさんはユウカちゃんに「あら、邪魔したらだめやよー」と言った。すると、ユウカちゃんはヒダさんからすぐ離れた。

この時、ユウカちゃんはヒダさんの態度から何かを察して、ヒダさんから距離を置いたように思われる。一方、高齢の利用者も同様に、障害のある子どもに対して何かを察していると感じることがあった。

【エピソード 17】 ユウカちゃんがアンパンマンの DVD を見ていた時のこと。昼寝から目覚めたアオキさんが隣の席に座った。アオキさんは横にいるユウカちゃんを見て「何見とるが？」「面白いけ？アンパンマン」などと話しかけた。しかし、ユウカちゃんは映像に夢中で、アオキさんに反応を示さない。すると、アオキさんはそれから話しかけることは無かつ

た。

この時、アオキさんはユウカちゃんに話しかけても、ユウカちゃんはDVDに夢中で振り向いてくれないので、距離を置いたように感じた。

障害のある子どもも高齢の利用者もそれぞれ、相手が自分に対して好意的なのかどうかや興味関心を持っているかどうかを、相手の態度から感じ取っているのではないだろうか。そして、自分に対して好意的あるいは興味関心を持っている相手に対しては積極的に関わろうとする一方、自分に対して好意的ではない、あるいは関心が薄い相手に対しては距離を置くということがあるのではないか。つまり、両者は一緒にいる相手に対して少なからず関心を持っていて、自分が付き合う相手を選んでいる場合もあると考える。ただし、タカちゃんのように、誰に対しても人見知りすることなく自ら近づいていき、高齢の利用者たちから愛されている子どももいることを忘れてはならない。

## 第5節 何もしない時間

### 第1項 登場人物

・タカちゃん

…脳性麻痺のある小学1年生。第1節第1項参照。

・ハラダさん

…90代の高齢の利用者。要介護度1。中程度の認知症がある。

### 第2項 何もしない時間

第2節、第4節では、子どもと高齢の利用者が一緒に遊んでいる場面を中心に紹介したが、フィールドワークでは両者が何もせずただ一緒にいるだけというような場面も見られた。そんな「何もしない時間」が持つ意味について考えたい。

【エピソード18】高齢の利用者とタカちゃんは、おやつを食べ終わった15時から15時30分までの30分程の間何をするわけでもなく、ぼーっとしていた。15時30分からは高齢の利用者の送迎が始まるので、今は準備をする時間らしい。高齢の利用者は眠たそうにしている人もいる。スタッフの介助でトイレに行く人もいた。タカちゃんはぼーっとして静かに椅子に座っている。

私は皆が暇そうにしているので何かしないのか？と思った。しかし、誰も動く様子は無く送迎が始まるのを待っているようだ。

しばらくすると、タカちゃんが「うー」と戸棚を指さして、隣に座っているハラダさんに何かを訴え出した。ハラダさんは「今日は眠たいから、ゴミ箱作るのはお休みよ」と言った。スタッフによると、ハラダさんはこの時間にはよくチラシを折ってゴミ箱を作っているそうで、この時、タカちゃんはハラダさんに「ゴミ箱を作ってほしい」と訴えていたのだそう。タカちゃんは何度も戸棚を指差して訴えるが、ハラダさんは「眠いからお休み」と言って眠たそうに頬杖を付いている。タカちゃんがしつこく訴えるので、しばらくすると、スタッフが戸棚からチラシを取り出し、ハラダさんに「ゴミ箱作ってー」と手渡した。ハラダさんは、仕方ないなという感じでチラシを折り始めた。タカちゃんは満足そうにハラダさんがチラシを折っているのを眺めている。

スタッフはこのやりとりを見て「なんとなく、コミュニケーション、交流しているでしょ？こうしなきゃいけない、ああしなきゃいけないっていうのはうちにはないから」と私に言った。

この時、私は皆が暇そうにしているので皆で何かしないのか？と思った。しかし、現場では何もしなくてもいい、つまり、何かする必要はないと考えられていた。何もしなくても言

葉を交わさずとも、人と一緒にいるだけで落ち着くことだってあるだろう。スタッフの言葉からも、施設では、皆でゲームをするなど楽しい時間を過ごすことも、静かでゆったりとした時間を過ごすことも、どちらも必要だと考えられていることが分かる。では、利用者たちはこの時どのような気持ちだったのだろうか。実は、高齢の利用者もタカちゃんも何かしたいと思った時は、自らアクションを起こすことはできる。例えば、トイレに行きたい人は、自ら訴えたり歩いて行ったりできるし、タカちゃんも自ら椅子から降りてその場から離れたり、声を出したりして意思表示することができる。しかし、その場にいた人の多くは、そうしたアクションは起こしていなかった。そのため、スタッフと同様に利用者たちも特別何もしなくてもいいと思っていたのではないだろうか。何もしない利用者たちは静かな時間を味わい、くつろいでいたのかもしれない。

また、タカちゃんとハラダさんのやりとりは、この何もしない時間に自然と生まれた。自然と生まれたとは言え、やりとりが始まる前、一見タカちゃんは、何もせずボーっとしているようで、ハラダさんが暇そうにしているのを見て、「しめしめ、ゴミ箱を作ってもらおう」とか色々考えていたいたのではないだろうか。そのようにタカちゃんは、見たり考えたりしていたため、アクションを起こすことができたのだとも言えるかもしれない。

何をせずとも一緒にいれば、お互いの姿が目に入る。そして、タカちゃんのように一緒に何かしたいと思ってアクションを起こすこともあったりなかったり。このように、ただ一緒にいるだけでも、子どもと高齢者はお互いに影響を与えているのだと考える

また、私はタカちゃんとハラダさんのやりとりから、2人が素直な気持ちでお互いに接していることに気づいた。言い換えると、2人とも遠慮が無い。タカちゃんが遠慮なく、眠たそうにしているハラダさんに対して何度もお願いするのに対して、ハラダさんも遠慮なく「眠いからお休みね」ときっぱりと伝え、なかなかタカちゃんの要求を飲もうとしなかった。このように遠慮が無いやりとりが交わされている様子から、2人は特別気を遣うことなく、正直な気持ちを伝えていたように感じる。そして、結局タカちゃんのわがままで眠たいところを起こされ、ゴミ箱を折られることになったハラダさんだったが、それに対して別に怒るわけではなかった。相手がタカちゃんだったから、ハラダさんは許せたのかもしれない。とは言え、このようにお互いに対して遠慮が無い中でも、現場ではお互いに対して気遣いが不足しているなどとネガティブに捉えられてはいない。すれ違っているようで、心が通じているように感じられる。

## 第6節 フィールドワークを通して

フィールドワークを通して、様々な「気付き」を体験することができた。調査を始めた当初、私は交流自体を求め過ぎていた。交流があればあるほど良いと、そして何かしらの相互作用があるとなお良いと思っていた。しかし、人同士の関わりに絶対は存在しない。人間はロボットじゃない（大空と大地のぽぴー村の宮崎さんの受け売りなのだが）から期待通りにならないことがあって当然だと思う。肩の力を抜いて構えるくらいが良かったのかもしれない。

ここで、当初私が幼老の交流を求め過ぎていたその理由について説明したい。私は大学2年の頃から認知症グループホームでアルバイトをしている。入所している高齢の利用者は、たまの外出はあっても毎日施設で生活するため、家族や地域社会との関わりが少ないのが事実だ。そうした面で、デイサービスなどの在宅介護サービスと比べると、入所施設は閉鎖的な場所である。家に帰ることができない施設の中での生活。高齢の入所者たちから「家に帰りたい」と訴えられることがあっても、その度に返す言葉に詰まってしまう。そんな高齢の入所者たちの楽しみの1つは、テレビで赤ちゃんや子どもの映像を見ることである。笑顔の赤ちゃんの映像や歌を歌う小さな子どもの映像をテレビで流すと、高齢の利用者数人は「あら可愛い〜」「いい子やねえ」と言い、画面の向こうの小さな子どもに笑顔で手を振ったり、時には涙を流したりする。そうした姿を見ていると、本当に会わせてあげられたらどんなにいいだろうと思う。このことが調査当初の私の姿勢に大きく影響していたのだ。

富山型デイサービスでは、子どもと高齢者が共に過ごすことができる。そこでは当たり前前の光景なのだが、私にとってはやはり特別で、大切にしたい光景だ。両者がいることには、良いことばかりではないかもしれない。例えば、事故やトラブルの危険性、スタッフの負担など。フィールドワークを通して施設側の苦勞も感じられることもあった。しかし、その空間がどれだけ貴重で、どれだけ大きな力を持っているのかについても肌で感じてきた。この先もずっと無くしてはならない場所だと思う。こうしたことに気づくことができたのは、本調査で取り上げられなかったフィールドワークやインタビューも含め、調査に協力して頂いた方々のおかげである。調査を振り返ってみて、自分の力だけでできたことは1つとして無く、本当に多くの人に助けられたことを実感している。心から感謝申し上げたい。

## 第7章 エスノグラフィーから見えること

本調査で確認できた富山型デイサービスにおける幼老の交流の特徴を以下に記す。

### 第1節 交流の形態と内容

施設で見られた幼老の交流は、その場の状況で、形態や内容など臨機応変に繰り出されていた。交流の形態は、おおまかに（1）一緒に何かする（2）一緒にいるだけの2つに分けられる。以下は詳細である。

#### （1）子どもを高齢の利用者が見守る

…高齢の利用者が子どもの姿を目で追う、声をかけるなどして見守る様子が多く確認できた（p11 第5章第2節第2項、p24 第6章第2節第2項）。このような「見守り」が多い理由として、高齢の利用者が声をかけても、子どもは言葉を理解できず応えることができないこと、高齢の利用者の身体が不自由なこと（手や足が動かしにくい）が考えられる。

#### （2）一緒に何かする

…子どもと高齢の利用者が一緒に遊ぶ様子が何度か確認できた。例えば、じゃんけんをする、歌を歌う、ゲームで遊ぶなど（p11 第5章第2節第2項）。また、複数人でゲームをする時などは、利用者間の意思疎通を円滑にするため、スタッフが間に入り声をかけるなどしてサポートすることがある（p24 第6章第2節第2項）。

#### （3）一緒にいるだけ

…子どもと高齢の利用者が、隣同士の席に座るなど近い距離で過ごす状態。スタッフは幼老の交流を促進するように干渉することもあまり無いため、両者が何もせずただ共に同じ時間を過ごすということも多い（p34-35 第6章第5節第2項）。この時、両者はそれぞれ自分の好きなことをして過ごしており、交流は発生していないように見えるが、実はお互いのことを気にしていることがある。例えば、専正寺デイサービスまごころで、ケイクンが近くにいるムライさんにぶつからないように配慮しながら遊んでいた場面が見られた（p30-33 第6章第4節第2項、第4項）。

また、交流の内容は、利用者を主体として決められることが多い。例えば、専正寺デイサービスまごころでは、タカちゃんのリクエストによって利用者複数人で神経衰弱のゲームをしていた（p24 第6章第2節第2項）。交流の内容に関して、スタッフは指示するなど必要以上に干渉することはあまり無い。

また、交流が発生するのは、子どもと高齢の利用者が近くにおり、どちらからともなく相手に対してアクション（声をかける、ボディタッチをするなど）を起こした時が多い。例えば、大空と大地のぼびー村でユウカちゃんとノバラさんが隣同士で座っていた時、相手の姿を見て自然と声をかけたり、ボディタッチをしたりする様子が見られた（p15-16 第



5章第3節第2項)。ただし、スタッフが交流の機会を設ける場合も時折見られる。例えば、大空と大地のぼぴー村でスタッフがハナちゃん（障害のある子ども）をアオキさん（高齢の利用者）のもとに誘導することがあった（p12-13 第5章第2節第4項）。

## 第2節 交流をする利用者の特徴

交流は、特定の子どもと高齢の利用者の間で行われる傾向がある。かつて子や孫の世話をしてきた女性の高齢の利用者は、子どもに対して好意的に接することが多い。また、小学校低学年以下など年齢が低い子どもは、高学年の子どもに比べて高齢の利用者とよく交流する傾向がある。一方で、全く関わろうとしない子ども、高齢の利用者も存在している。そうした子どもは1人遊びや子ども同士での遊びを好み、高齢の利用者は個人で時間を過ごすことを好んでいる。また、子どもと高齢の利用者が数年単位で交流を続けているような事例では、子どもが成長と共に高齢の利用者から離れていく傾向がある。例えば、大空と大地のぼぴー村でハナちゃんとアオキさんが一緒に遊ぶ機会が減っていることが確認できた（p13 第5章第2節第5項）。このように高齢の利用者との交流の機会の有無や頻度は、子どもが1人遊びができるかどうかで左右されることが考えられる。

## 第3節 交流の様子

高齢の利用者は、子どもの姿を見かけると、笑顔になったり積極的に声をかけたりすることがある。高齢の利用者にとって、小さな子どもの存在が刺激になっていると考える。例えば、専正寺デイサービスまごころでは、タカちゃんをきっかけとして高齢の利用者間で会話が発生したり、場が盛り上がった様子が見られた（p25 第6章第2節第3項）。また、子どものお世話をするを自分の役割として認識している高齢の利用者もあり、そうした高齢の利用者にとって子どもは守るべき大切な存在であると考えられる。例えば、大空と大地のぼぴー村では、アオキさんはハナちゃんのお世話をするを自分の仕事と思っており、よく声をかけて気にしている様子が見られた（p12 第5章第2節第3項）。また、専正寺デイサービスまごころではカネさんとムライさんが自発的にタカちゃんのお世話をする様子が見られた（p28 第6章第3節第2項）。

一方、子どもは高齢の利用者と積極的に関わろうとすることは少ないが、高齢の利用者に自ら近づいて遊んでもらうなど、好意的に接している子どもの存在も確認できた（p26 第6章第2節第4項）。また、付き合いが長い高齢者に対しては親しみを表現する子どももいる（p13-14 第5章第2節第6項）。

また、大空と大地のぼぴー村のハナちゃんとユウカちゃん、専正寺デイサービスまごころのタカちゃんなど、言葉を話せない子どもは、高齢の利用者からの問いかけに応えられなかったり、意思疎通が上手くいかなかったりすることがある。このように、両者がコミュ

ニケーションですれ違うことも度々あるが、そのことについてネガティブに捉えられることはない。また、言葉はなくとも、両者の間で表情やジェスチャーなどで意思疎通ができていることもある（p11 第 5 章第 2 節第 2 項、p28 第 6 章第 3 節第 2 項）。

#### 第 4 節 障害のある子どもに対する高齢の利用者の接し方

障害のある子どもに対して、先入観を持たずに接する（可愛がる、褒める、注意するなど）ことができる高齢の利用者の存在が確認できた。大空と大地のぼびー村では、ミヤシマさんが、トモくんやユウカちゃんに対して先入観を持たずに、褒めたり注意したりする様子（p18 第 5 章第 4 節第 2 項）、専正寺デイサービスまごころでは、カネさんがタカちゃんに「いただきます」の挨拶を教える様子（p28 第 6 章第 3 節第 2 項）が見られた。このように、先入観を持たないで接することができる理由として、高齢の利用者が認知症であることや、障害に関してあまり馴染みが無いことが考えられる。しかし、そのような高齢の利用者だけでなく、障害のある子どもに対して距離を置く高齢の利用者もいるため、障害のある子どもに対する高齢の利用者の眼差しは多様であると言える（p20 第 5 章第 4 節第 3 項）。

また、障害のある子どもが問題行動を起こした場合、高齢の利用者は注意することはあるが、怒ることはあまり無く、仕方がないこととして寛容に受け入れている場合が多い。また、子どもを障害児として認識していない高齢の利用者は、障害のある子どもの問題行動を、障害によるものとしてではなく、年齢的な未熟さによるものとして捉えている。例えば、大空と大地のぼびー村では、ユウカちゃんの問題行動に対してノバラさんやタバタさんが寛容に受け止める様子（p18-20 第 5 章第 3 節第 2 項）、専正寺デイサービスまごころでは、ケイくんの問題行動に対してムライさんが注意をしつつ冷静に対応していた様子（p30-31 第 6 章第 4 節第 2 項、第 3 項）が見られた。

#### 第 5 節 障害のある子どもの配慮

高齢の利用者に対して配慮をすることができる子どもの存在が確認できた。例えば、高齢の利用者にぶつからないようにする、寝ているところを起こさないよう静かにするなど。子どもたちは施設で過ごしている間、スタッフの注意を受ける、高齢の利用者が介助される様子を見るなどしていくなかで、高齢の利用者に対して配慮が必要なことが分かり、そうした配慮を次第に身に付けていくことができると考える。大空と大地のぼびー村ではトモくんとソウタくんが昼寝中の高齢の利用者に配慮して静かにする様子（p21-22 第 5 章第 5 節第 2 項）、専正寺デイサービスまごころでは、ケイくんがムライさんにぶつからないように配慮して遊んでいる様子（p30-33 第 6 章第 4 節第 2 項、第 4 項）が確認できた。

## 第8章 考察

### 第1節 利用者本位の交流の可能性

本調査でみられた幼老の交流は、内容、時間、頻度、利用者の数など様々な面で自由度が高い。理由として、利用者が主体となって、それぞれが好きな時に好きなように交流していることが考えられる。このように、本調査で取り上げた富山型デイサービスのような小規模施設では、利用者本位の交流を継続して実現することが可能なのではないだろうか。

先行研究で取り上げられた幼老複合施設での幼老の交流は、イベントや行事など施設側が主体となって実施されるような形態が多い。そのため、金森（2012）では、交流を企画するスタッフの役割や空間を工夫して利用することの重要性について論じられていた。しかし、本調査で取り上げた富山型デイサービスでは、スタッフはほとんど交流に干渉せず、設備の配置など空間に関する工夫もあまり見られない。

幼老複合施設（大規模施設）と富山型デイサービス（小規模施設）との交流の違いに関して、幼老の交流についてのスタッフの考え方が大きく影響していると考ええる。富山型デイサービスにおいても、イベントや行事を催すなどして、幼老の交流を促すことは可能であるが、そうしたことをスタッフは敢えてしていないように思われる。そのため、子どもと全く関わらない高齢の利用者、高齢の利用者と全く関わらない子どもの存在も少なくないのだが、そのことについて、スタッフはネガティブに捉えてはいない。それは、大空と大地のぼび一村の代表の宮崎弘美さんが、「施設でどう過ごすかは利用者が決めている」と話していたように、施設では利用者が主体となって過ごすことを重視しており、幼老の交流はあくまでその手段の1つとして捉えられているためだと考える。利用者の中には交流が好きな人もいれば苦手な人もいるため、スタッフは全ての利用者に交流を押し付けるようなことは、理念に反すると考えているのではないだろうか。

このように、本調査で取り上げた富山型デイサービスのような小規模施設では、利用者次第で交流の様態が違ってくる。利用者本位であることを大切にする施設では、お仕着せではなく、利用者が望んだ形で交流を実現できる可能性があると考ええる。

## 第2節 交流がつくる居場所

第3章 先行研究で触れたように、富山型デイサービスなど小規模施設での幼老の交流を主題的に論じた研究はこれまでほとんど提出されておらず、先行研究で取り上げられる子どもたちは、健常児の場合が多い。しかし、本調査で取り上げた子どもは皆、障害児である。富山型デイサービスは、障害に関わらず全ての人が利用することができるが、現状、施設を利用する子どもは障害児である場合が多い。理由として、健常の子どもに比べて障害のある子どもが放課後に利用できるサービスが限られていることが考えられる。健常の子どもは、放課後は学童保育や家庭で過ごす、あるいは塾や習い事をするなど、放課後の過ごし方は多様である。一方で、障害のある子どもは、保護者の見守りや補助が必要で、専門的なサービスを利用せざるを得ない場合がある。例えば、学童保育は、特別支援学級に通う障害のある子どもも利用することはできるのだが、喧嘩など問題が起きるからと利用を断られることもあるという。そうした障害のある子どもの受け皿として放課後等デイサービスや富山型デイサービスは機能しているのではないだろうか。

また、障害のある子どもも高齢者も施設を利用する1番の理由は、家族の負担を減らすためである。利用者の家族が子育てや介護に付きっ切りにならず、仕事や趣味などをして社会との繋がりを持ち、自分らしく生活するためには、サービスを利用することが不可欠のように思われる。一方で、利用者たちも家族と同様に自分らしく生活するために、家庭以外の居場所として施設が必要なのではないだろうか。利用者たちは、施設で様々な人と関わることで、社会との繋がりを持つことができる。本調査で見られた高齢の利用者と障害のある子どもの交流では、そのような面での良さが感じられた。例えば、認知症の高齢の利用者が、障害のある子どもに対して先入観を持たずに、可愛がったり叱ったりできるということ。障害のある子どもたちは、社会で生活していくなかで、偏見でみられて苦しい思いをすることもあるだろう。そんななかで、障害に関わらず1人の子どもとして自分を見てくれる高齢の利用者に対して、障害のある子どもは、自分らしく振る舞いやすいのではないだろうか。また、高齢の利用者も子どもと接することで自然と役割意識や責任感を持つことができると分かった。認知症の進行や身体機能の低下により、自分1人でできることが減って介助されることが増える高齢の利用者にとって、子どもの見守りなどの役割ができることは自分らしくあるための大きな支えになるのではないだろうか。

このように、障害のある子どもと高齢の利用者が交流することで、お互いが自分らしくいられるような居場所が作りだされているように感じる。利用者たちにとって、そのような居場所は貴重で大切なものになり得るのではないだろうか。

### 第3節 子どもと高齢者の関係の変化

先行研究で取り上げられる幼老複合施設では、施設を利用できる子どもに年齢制限がある（保育園は小学校入学前まで、学童は低学年までを中心としている施設が多い）ため、子どもは年齢が上がると施設を利用しなくなる場合が多いと思われる。しかし、本調査で取り上げた富山型デイサービスでは、施設利用者に年齢制限はなく、（障害のある子どもが成人しても施設を利用している事例もある）同一の施設内で、同一の子どもと高齢者が数年以上の比較的長い間を共に過ごすことができる。そのため、大空と大地のぼびー村のハナちゃんとおオキさんの関係が段々疎遠になっていったように、富山型デイサービスでは、成長した子どもが、徐々に高齢の利用者から離れていく場面も目にすることができる。しかし、先行研究では、このように子どもと高齢者の関係が疎遠になる事例については論じられていなかった。一方、立松（2008）では、高齢者と子どもの小規模で固定化したメンバーの日常生活における関わりが、自然な関係性やお互いを理解して思いやるような関係性、さらに持続的な関係性を構築させていくとしていた。このように先行研究では、子どもと高齢者が交流を重ねることで、両者の関係が親しくなり、それが持続することを論じているが、その際に想定されるタイムスパンは、数年以上の長いものではないように思われる。

先行研究には、このような子どもの変化に関する視点が欠けているように思う。もちろん幼老複合施設でも、そうした変化は起こる可能性がないとは言えないが、やはり特定の子どもと高齢の利用者の関係が続くのは、富山型デイサービスといった小規模施設の特徴と言えるのではないかな。

子どもが高齢の利用者から離れていくこと。これは、子どもが成長と共に自分で考えて行動できるようになり、自分の世界をもつことを意味している。ただし、以前と比べて表面的に疎遠になったといっても、両者の関係が完全に閉ざされてしまうわけではない。ハナちゃんとおオキさんのように時折、相手のことを気にすることもあるため、お互いの存在が大切なものであることは変わらないように思える。そうした意味では、持続的な関係性と言えるのではないだろうか。

#### 第4節 子どもと高齢者の関係の捉え方

金子、中西(2007)は、子どもと高齢者の関係は、両者がいれば自然と会話や交歓が生じ、子どもの成長や高齢者の積極性を促す効果があるといった関係ではなく、むしろ両者の間に食い違いが生じたり、会話や応答も生まれず、お互いが別々の方向を向くような「背中合わせの関係」であるとしていた。このように、先行研究では度々、幼老の交流で両者に笑顔や会話が無いと交流自体を失敗と判断するような基準の厳しさが伺える。そうした研究では、子どもと高齢者の関係について、大幅に高い理想を求めていると考える。

本調査の、障害のある子どもと高齢の利用者間のコミュニケーションも実際難しく、金子、中西(2007)の「背中合わせの関係」に該当するような場面も多くみられた。例えば、会話が成り立たないことや相手が言ったことに無反応なこと、さらに、衝突が起きてしまうこともあった。しかし、そのことについて、現場ではあまりネガティブに捉えられてはいなかった。障害や認知症があると、コミュニケーションの面で不都合がどうしても起きてしまう。そのため、施設ではそうした不都合をある程度は自然なこととして受け入れているのだと思われる。また、大空と大地のぼびー村のハナちゃんとアオキさん、専正寺デイサービスまごころのタカちゃんと高齢の利用者たちのように、会話が成り立たない、意思疎通が難しい中でも良好な関係を築いている事例も確認できた。先行研究のように、子どもと高齢者の関係を、1つの場面を切り取って「背中合わせの関係」とするのはなく、当事者の視点から、長い目で見て総合的に判断することが必要なのではないだろうか。

人は誰しもできないことがあって当然だが、発展途上の子どもと老いていく高齢者は、なおさらできないことが多いのは当然で、人の助けが必要な存在である。また、人とのコミュニケーションは答えの無い問いのラリーのようで、私自身も常々非常に難しいと思っている。このことを踏まえて、「できること」は良いことかもしれない。それでは、「できないこと」は悪いことなのだろうか。私は、できないことをネガティブに捉え過ぎることはよくないと思う。本調査で見られた幼老の交流は、とても自由であった。会話やアイコンタクトがあるとかないとか、そういうことに縛られない。両者は素直な気持ちで接する分、遠慮が無いので衝突することもある。しかし、そのことをあまり気にしない。細かいことにこだわらず、お互いの存在を感じて笑い合うような、微かなようで確かなコミュニケーションをとっている。私は、そんな形の交流をネガティブに捉えることはできない。

## 第5節 「交流」を再考する

北村（2003）では、幼老複合施設でみられる交流を「計画交流」と「自然発生交流」の2つに分けられるとしていた。しかし、本調査での幼老の交流を北村（2003）と同様に分類して捉えることはできなかった。例えば、大空と大地のぼびー村でスタッフが、ハナちゃんをアオキさんの傍に誘導することがあると紹介したが、このようにスタッフがとっさに子どもを誘導し、その後スタッフは干渉せず、どのような交流をするかを両者に任せるといった形の交流。スタッフが交流の機会を作ったので「計画交流」であるといえるかもしれないが、その後両者がどのように交流するかは、自然の成り行きであるので、「自然発生交流」といえるかもしれない。このように、本調査では、北村（2003）の「計画交流」とも「自然発生交流」とも断定できないような形態の交流が多く確認できた。

そもそも、「交流」とは何なのか。先行研究では、「交流」を目で確認できる形のコミュニケーションが交わされている状態と判断していることが多い（例えば、会話や挨拶、タッチング、アイコンタクトなど）。しかし、実際に現場で見られる子どもと高齢の利用者の関わりについて、どこからどこまでを交流と捉えるか判断することは難しい。例えば、専正寺デイサービスまごころで、ケイクンがムライさんにぶつからないように遊んでいた場面のよう、両者の間で言葉は交わされていない中で、相手に対して静かに配慮しているということがある。先行研究で多く使われる「交流」にのっとると、このような配慮をすることは「交流」ではないと見なされてしまうだろう。しかし、静かに「配慮すること」も交流の1つと言っても良いのではないかと私は考える。静かな配慮は相手に伝わるかどうかは分からないが、相手に対する思いやりの表現であることは確かであると思うからだ。

このように、現場で見られる関わりの全てを先行研究で使用される「交流」に沿って捉えることは難しい。私は、交流を形態によって分類するなど、恣意的に判断するのではなく、もっと柔軟に捉えていいのではないかと考える。極端かもしれないが私は、何をしなくとも、一緒にいるだけで交流になっていると思うことがある。例えば、本調査では、一緒にいることで、お互いがお互いの存在を気にしていて、配慮したり何かしらのアクションを起こしたりすることがあった（p34 第6章第5節第2項参照）。このように、両者は一緒にいるだけでお互いに影響を与えていることが確認できた。こうしたやりとり1つ1つは、些細なことかもしれないが、積み重なることで大きな影響となり、時にはお互いを変化させることもあるかもしれない。そのため、交流ではないと切り捨ててしまうのは惜しいと考える。

## 参考文献

- ・金子真由子、山口恒夫,2007,『「老人と子ども統合ケア」における「老人」と「子ども」の交流—N 県 K 福祉総合施設への参与観察を通して』,信州大学教育学部紀要 (119),67-78,信州大学教育学部
- ・金森由華,2012,『高齢者と子どもの世代間交流：交流内容を中心に』,愛知淑徳大学論集.福祉貢献学部篇 2 69-77,愛知淑徳大学福祉貢献学部
- ・北村安樹子,2003,『幼老複合施設における異世代交流の取り組み—福祉社会における幼老共生ケアの可能性』,ライフデザインレポート (153),4-15,第一生命経済研究所ライフデザイン研究本部
- ・立松麻衣子,2008,『高齢者の役割作りとインタージェネレーションケアを行うための施設側の方策：高齢者と地域の相互関係の構築に関する研究』,日本家政学会誌 59(7),日本家政学会
- ・富山県,2019『とやまの地域共生 富山型デイサービス「平成から令和へ」いろんな人いろんな色～新しいステージ～』富山県厚生部厚生企画課（パンフレットより引用）